

# 「光り輝くもの」と萬歳樂山



# 「光り輝くもの」と萬歳楽山

## 目次

|                                 |      |
|---------------------------------|------|
| 一、萬歳楽山について                      | p 1  |
| 二、萬歳楽山神大盤石「要石」のこと               | p 2  |
| 三、萬歳楽山「見えざるの大伽藍」                | p 8  |
| 四、萬歳楽山と般若理趣經                    | p 10 |
| 五、萬歳楽山禪定伽藍ビジョンと登嶺について           | p 11 |
| 六、萬歳楽山に天照皇大神が顕る                 | p 13 |
| 七、天皇皇后兩陛下 東日本大震災被災者見舞われる萬歳楽山の神事 | p 15 |
| 八、大神事の本誓 正念誦…阿弥陀如来根本陀羅尼百遍       | p 19 |
| 九、「光り輝くもの」から『紅顔梨秘法』を授かる         | p 20 |
| 十、「無量壽如来觀行供養儀軌」を授かる             | p 22 |

|                                                   |      |
|---------------------------------------------------|------|
| 十一、大地震や氣候変動、新型コロナウィルス感染の苦悩                        | p 22 |
| 十二、ボロブドール遺跡はブッダの内觀を人類に指し示し、ひとり畔の内觀をうながしている        |      |
| その一 彌陀の内觀                                         | p 23 |
| 十三、傳弘法大師                                          |      |
| その二 「紅玻璃秘法」の内觀                                    | p 25 |
| 十四、「ブッダの瞑想」                                       |      |
| その三 自己凝視・如実知自心                                    | p 27 |
| 十五、釈迦牟尼世尊のみに光り輝くもの顕れ覚醒をうながす                       | p 28 |
| その四 五相成身觀                                         |      |
| その五 枕經と内觀                                         |      |
| 十六、「天王陛下がジャワのボロブドール寺院遺跡を訪ねられた」意義と初会金剛頂經と五相成身觀について | p 32 |
| 十七、ボロブドール寺院遺跡と五                                   |      |

相成身觀について p 35

十八、萬歳楽山の見えざる立体曼荼羅 p 38

十九、萬歳楽山頂禪の根本所依の禪定法は「五相成身觀」にある p 39

二十、弘法大師空海『即身成仏義』 p 49

二十一、結びに

弘法大師空海の『真言密教』

p 57

参考文献



## 一、萬歳樂山について

萬歳樂山の萬歳樂とは、唐の雅樂の曲名である。また、伝説によると、鎌倉幕府の頃、中国に萬歳樂山という山があつてその仙人が住んでおり、その仙人から日本にも萬歳樂山と同じ靈妙不可思議なる山があり、藥草藥石の宝庫なり、そこを開いて多くの病めるものを救うべしというお告げにより、探したところ全くその通りの山が見つかり、それを萬歳樂山と名付けた。多くの貴重な岩石藥石、藥草に満ちあふれた山で、これを知られて荒らされてはならないということで、多くの恐ろしい伝説を作り、人が山には入らぬよう封印したという。

（注…この山の由来を示す学術的文献は不明）

だが、未熟ながら、この山から明かされてきたことは、小生の推量の域を

出ないのだが、最初「この山の靈名が

アルミトラⅡマイトレーヤ（弥勒佛）

のマンダラ（萬歳樂）に由来するので

はないか」ということ。太古の人々は

この山の靈的響きを耳にすることがで

きており、それがミトラⅡマイトレー

ヤⅡマンダラⅡマンザイラグⅡ萬歳樂

となったのではないかと推量する。

「萬歳」は悠久、久遠、永遠すなわち

不生不滅、また、「空なる阿字本不生」

や局所性を超える遍在性を意味する。

樂は樂園、天国、平安淨土すなわち極

樂淨土を示している。

すなわち、萬歳樂山の由来は「不生

なる弥勒淨土」であり、その弥勒淨土

はすなわち「ビルシャナ仏三千大千世

界の蓮華藏世界」であり、また、「大悲

胎藏中台八葉蓮華大日如來の密嚴淨

土」であり、「光り輝くものである金剛

界大日如來の密嚴淨土」と推量する。

（なお、東日本大震災後、萬歳樂山に

顕現している光り輝くものは、金胎兩

部不二の大日如來や紅玻璃時期阿弥陀

如來など五仏であることが明かされて

きている。（後記）

この萬歳樂山はインドのアルナチャ

ラの丘とともに地球意識と深く関わる

靈峰である。

さらに、萬歳樂山は弥勒佛が光り輝

くものとして下生し、人類の意識の変

革をうながすものであることを示す靈

山でもある。

弥勒佛は釈迦滅後五十六億七千万年

後（三千年後の説もある）に姿をあら

わし、多くの人々を救済する佛で、兜

率天で説法している。（弘法大師は即身

成仏し、弥勒佛とともに下生し、世界

を救済すると弟子等に遺言している）

末法（現在）万年の救済佛といわれて

いる。

萬歳樂山が指し示している弥勒佛は

地球上の人類の眞の意識の自己変革を

促す佛である。ゆえに、地球のマグマを制御する意識と深く関わる。地球滅亡の危機に瀕するとき、人類の意識の変容をもたらし、新人類を創発せしむる佛である。

萬歳樂山は弥勒佛の加持身体であり、今でも、地球浄化肅正の強大なるエネルギーを調整していると推量する。

というのも、萬歳樂山に導かれるときは、どういう訳か、世界に大地震を含めた天変地異が発生するときであったからである。

よって、単に、物見遊山や自我の狭量さをもって興味本位に入山したとしても、何ら期待するものは得られないと思われる。

萬歳樂山から響いてくる本初不生の響きを理解せず、いたづらに、神々の宇宙意識をもてあそぶことは許されないと自戒する。

萬歳樂山を靈峰と感受する者は、「人

類意識の覚醒」すなわち「法眼圓明なる不生の仏心に生きる活き如来」として刻々に新しく生まれかわるものであるという自覚を持たねばならない。

萬歳樂山は古来より地震除けや災厄除けの山として信仰されてきた。実は、地球浄化のエネルギーの天変地異をはじめ生老病死に苦悩する万生の魂を本初不生へと導く、金剛界曼荼羅および紅玻璃阿弥陀、未来に下生する弥勒佛の浄土に導く聖なる靈山である。

この山を訪れるもの、皆、法眼圓明なる本初不生の仏心を体解して、まさに、ひとりびとりが、いま、ここに活き如来として在らんことを祈念すべきであろう。

## 二、萬歳樂山神大盤石「要石」のこと



靈峰萬歳樂山にある「要石」、これが江戸の人々が地震を鎮めるため信仰していた、「神々」が萬歳樂山に投げ入れたという「要石」であるとおもわれる。

萬歳樂山は古くから弘法大師が開かれた山として、また、天女が舞う山として知られおり、さらに、地震避けの山として人々に信仰されてきた山である。

そもそも、山そのものがご神体であり、みだりに入ってはならない神聖な山であると思う。それを物語るものが、萬歳樂山周辺で語られる「山の神の祟り」伝説であったり、さらに、上古代



の日本の文化や、ニュージーランドのある部族に伝承される物語から、「ある文明の意識の潮流」が「この山の持つ地球規模の自然なエネルギーを封じ込めて発展してきたが、その権威主義的思考文明やエゴの文明がやがて破綻を来す末法の時代に至るとき、封じ込められた力は再び蘇る。その時には、その強大なエネルギーが発動し、人類が自ら蒔いた種で起こした天変地異のまのあたりにし、人類自身が意識の変容を起こさざるを得なくなる」ことを物語っているものがいくつもある。現代は、このような神話的な話しは、全く荒唐無稽なものとして嘲笑されているが、果たして、嘲笑で済まされるものであろうか。というのも、それは、現代において、最も危惧される問題として浮上し、直面せざるを得ない事態に遭遇しているからである。



ところで、「萬歳楽」と「地震」の関わりを示す歴史資料の一つに「安政二年十月二日の大地震の時の錦絵」が数多く残されている。そこには、大地震の時に「萬歳楽・萬歳楽」と唱えていた様子が克明に描かれている。ホームページで「貴重書画像データベース」を検索すると閲覧できるので興味のある方はそちらを御覧になられるとよい。

しかし、なぜ、「地震除け」に「萬歳

楽」なのか？である。「萬歳楽」そのものには地震除けと直接関わるものはない。萬歳楽そのものは雅楽であり、「皇帝や天皇の即位を祝するとき鳳凰が飛来し萬歳・萬歳と舞った」ということが「萬歳楽」の起源と考えられている。

強いて云えば、天下太平・万民豊楽を願うたこと故だとも云えるかも知れない。

地震避けのこの山が神代の時代から「マンゼロク、マジヤラク、マンダラ、マイトレイヤ、ミトラ神」すなわち弥勒のご神体として呪文が伝承されてきたのかも知れないが推量に過ぎない。

江戸時代の錦絵に大鯰が地震を起こす元として描かれており、そのナマズを押さえるべく皇太神が御自らの御坐岩・通称『要石』を鹿島神と愛宕神に運ばせ鎮めさせたという神話信仰に基づいて、地震除けや災害除けに「萬歳楽・萬歳楽」となえていた資料が残っ

ている。

さて、萬歳楽山と命名されている山は、日本に一つしかない。中国大陆にもあるというのだが、その事実は今のところ無い。



平成二十二年十二月、筆者が現代教

化研究所の視察研究で訪れた國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館で偶々手にした資料に『神道祭祀の発展と神祇信仰の多様化』『上方震下り 瓢箪翁の化物 一名難獣といふ 安政二乙卯十月二日夜興行』という一枚のプリントがあった。それは全く予期せず手にしたものであったが、それには次のようなことが記されてあった。

「須弥山の地底に大鯰住り、変化て四足全体をなす、是を難獣とい云、一度首尾を動かす時ハ泰山を抜、蒼海を干し、宮殿・樓閣・堂塔・伽藍・太宗・庫倉を破損し、体より火ゑんをいだす事いとおびただしく、其阿云声百千の雷も物かハ南円浮台をくつがへすかとおもハる、世界の人民、是が為に居ところを破られ、財宝をうしなひ、**万歳楽**と怖おそる事**雷爺仁**に勝れり、

(略)

○抑此獣ものハ、神代の曆世豊秋津嶋に幡まりて、時々出て人民をなやめたるを、天下しろしめす皇太神鹿島の神に神託ありて、石の御坐(俗に要石)をもて其頭をおさへ動かし給ハば、依て此難獣の患ひなく、ゆるがぬ御代と榮つゝ諸人**万歳楽**をとなへたり、

されども諸神の居まさぬをりハ、僅にその身を動かすに、諸人**万才楽**とねふれハその難をのがるとかや、然るに此変化を待て、今時十月、八百万の神達出雲に御幸させぬひし闇を窺ひ、地中に動揺して三千六百の町々・家蔵を破損する事大かたならず、しばしば世界をくつがへすかと思はれし、此事、御留守居蛭子尊四より出雲国へ火急の御告に、皇太神の御指揮として鹿島の神・宕愛山の次郎坊只一時にお帰国ましまして、この難獣をおさへたる、かんぢん要の礎にせハ、盤石の如くなるべし、云々」

ここで、筆者が驚いたのは「萬歳樂」を称えるゆえんばかりでなく、「石の御座（俗に要石といふ）」くだりである。これは萬歳樂山に実際にある石を指すものとも思われるし、更に云うならば萬歳樂山そのものが皇太神の御坐石（大盤石）であり、これは地球の中心からマグマが盛り上がって岩の一部が地表に出ており皇太神がましまして、地球を司っている（鹿島大社境内の「要石」の由縁にもある）ということとつながり、まさしく、萬歳樂山は皇

太神宮の降臨し給う御山ということを裏付けているように思われる。十五年ほど前、この山の靈験に導かれ、萬歳樂山の登嶺する折、無知の小職をして、少しずつ、少しずつ、準備を整えるよう導いたのも萬歳樂山の眷属たちであった。山頂に至るまで数十回にわたりアクセスしたが、その初めて入山した折、鳥居をかけさせ、鶯をしてこちら

に来るように導かせ、至らしめられた場所がこの石の御座と云われる石群の所であった。その後、入山の度に必ず導かれるのが此の小生が「宝珠山」と名付けた大岩のところで、萬歳樂山頂付近の或る「松の木」のところであった。



この大岩のあるところから萬歳樂山を東西に流れる鯰（龍・白蛇）の胴体と見れる。

ば、ここはちょうど北に首を向けた鯰（龍・白蛇）の頭にあたる。

はたして、この萬歳樂山を江戸の錦絵に描かれた大鯰の化物と見ることは少々抵抗があるが、鯰は地球のマグマ活動であるから、萬歳樂山の強大なエネルギーのコントロールセンターは萬歳樂山であり、その要となっているのがこの御座である要石のあるところとなる。

この辺りの古い民話伝承にも「萬歳樂山の八丈岩で休んでいたので、大地震から自分の身を守ることができた。それからというものの、地震の時は必ず萬歳樂、萬歳樂と称えるようになった」





この岩こそ「要石」でありそれが此の「宝珠山」にあたるのであろう。

確かに、この岩の辺りは浄化と癒しのエネルギーが充滿している。ある方々に請われて、ここには、特に聖観世音菩薩と薬師如来を勧請させて頂いている。

平成二十年五月再び霊妙なる導きがあり、ミトラⅡマイトレーヤーⅡマカビルシャナ（大日如来）が地球上の生命の救済のため大盤石にまします姿は、まさしく長谷寺の十一面観世音菩薩と

雨宝童子（天照大神）と難陀竜王（春日大明神）の三尊仏のお姿としても霊験されているということであった。

ここは、現在、通称「大日岩」と称されているが、これは、十五年前、小生に同行した或る老人が要石に「大日如来と竜神を彫りたい」と願いでて、岩に彫り込んだものである。この彫られた像を見て古いと思われる方も多いと聞くが近年に彫られたものである。

本来、ここは、肝心要の御坐石「要石」の岩座であり、みだりに触れてはならない神の御坐である。神々が天地自然・地球や宇宙をコントロールしている最も神聖な場である。しかも、この「要石」は、この彫られたときには、そのような導きがあったとは気づかなかったが、後になって証された「萬歳楽山に顕現する見えざるもの」、即ち「普賢金剛薩埵・光り輝くもの」である「大日如来」と「五钴金剛杵」であ

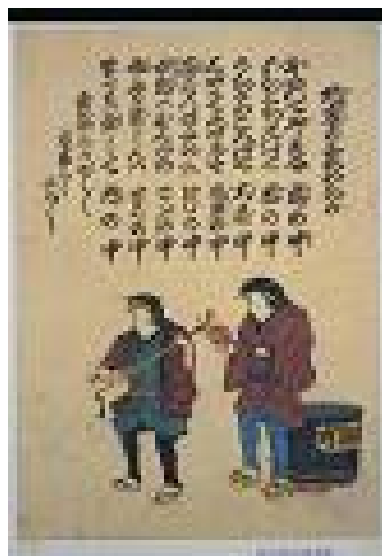
るマカバエネルギーを「龍神」としてを岩に刻している、最も神聖な場である。

おそらく、超古代に封じ込められた地球のエネルギーを象徴する実際の場であり、そこに封じ込められているエネルギーが龍・白蛇・鯰と姿で象徴され、それが光り輝くものと互換十合渉入している場なのであろう。

しかし、現代において、この象徴する意味について深く考察しなければ最も大きな命題が問われている。「いったい誰がこの山のエネルギーを封じ込めてきたのか？」ということである。現代はこの文明の大転換点に立つと思われる。文明のかつての大転換点を象徴する意味で、俗説では、天照皇大神の台座、あるいは、大聖不動明王の台座、あるいは鹿島宮の要石、これらは大盤石と言われる。地球の中心奥深くからの大きな岩の一角であるから、地球の



変動に微動題しない台座といわれ、神や如来や明王の台座、即ち、大盤石と言われる。



いわば、神々が地球変動のエネルギーを調整するため龍・白蛇・鯰のエネルギーを押さえ込んでいるとする象徴されるものは何であったのか。それは、一体、誰なのか。

古事記や日本書紀がそれまでの古傳を大幅に書き換えてしまったという説が語るように、天照大神がこの山を大盤石で押さえ込んだとされているが、それは為政者の思惑が優先する時代の神信仰であろう。

だが、それはある意味で人間中心主

義の文明の勃興であり、はたまた、自我による文明が行き着く先が近現代に見られる環境破壊と核の脅威である。

軌道修正メタノイアが予断を許せないところまで来た。神信仰の本来のものが、自我と同一化した絶対主義は概念化した神ではない。

宇宙や地球レベルの意識が根底にある。さまざまな宗教が正義や愛のもとに、どれほど侵略と支配と抹殺を繰り返してきたことか。ならず者の国家が国連を牛耳るのも、キリスト教やイスラム教のさまざまな教派が聖戦と称し、極悪非道の戦いを繰り返すのも、実は、天意を押さえ込んだエゴの文明の末路であり、終焉を遂げようとしているかのような現代文明かもしれない。

まさに、いま、ここで、大地震を起こす鯰の化け物とは、現代の人類文明そのものであり、萬歳楽山が始動するとすれば、それは間違いなく、恣意的

エゴの文明で地球を蝕んできた人類意識の大変革をうながすためであると確信している。ご覧なさい！萬歳楽山は地震除けのまじないの山だと言うが、彼が始動した途端、千年に一度という大地震、世界を震撼させたウィルス感染症問題、核兵器の脅威を笠に着て自己主張を繰り返す未熟者の権威主義的ならず者国家に翻弄されているではないか。このことを萬歳楽山が問うていたことを安易に考えてはならないと思うのである。





この写真は萬歳楽山を北から見たものだ、手前に宝珠の形をした山がある。宝珠山と名付けている。その宝珠山と萬歳楽山を繋ぐあたりに神の御坐要石がある。小生は萬歳楽山は龍でいえばその身体の胴体で、手前の宝珠山は龍の頭で、要石のあるところは竜の首根っこであると感じている。ここに光り

輝くものである大日如来すなわち天照皇大神が在して、龍であるマカバエを調整しつつ、宇宙的に地球を護っているところであると感受する。これまでに伝承されてきた神話にある、暴れる龍の首根っこを押さえつけるのではない。龍とともに地球をそのものをコントロールしていると推量する。



(注..令和元年に入って、導かれる「ジャワのボロボドールにある寺院遺跡」と共鳴する「光り輝くもの」の存

在が萬歳楽山において、見えざる大伽藍を設けておられることが小生の私見だが、証されている。)

### 三、萬歳楽山の大伽藍

さて、この萬歳楽山の山頂に登ると、しばしば、大伽藍のビジョンに遭遇することがある。もちろん、ビジョンであるから、山頂に実際の伽藍が建立されているわけではない。あくまで小生の想像に過ぎない。

はじめに見たものは、密教の大伽藍であった。自分が真言僧なので、自分の幻想なのだと思っているが、それにしても、伽藍から諸堂の本尊までリアルに見たのである。大門からはじまって根本中堂に至るまでみごとな大伽藍であった。このような伽藍は建立したくともそれこそ夢物語である。

そのビジョンをみてしばらく過ぎたある日のこと、所用があつて上京し、

立ち寄った寺の机の上に開かれていた図集に目が止まる。ちょうど開かれてあったのだが、そこに、寺院の伽藍の図が描かれており、萬歳樂山頂で見た伽藍のビジョンと全く同じもので、わが目を疑うほどのものであった。奈良の「当麻寺」とあった。この寺の創建の頃の大伽藍の絵図が、まるで萬歳樂山に建立された大伽藍ビジョンに近かった。すべてがそのままに描かれていた。

次に萬歳樂山頂で得た大伽藍のビジョンは、そういった壮大な建築物ではないが、しかし、神聖な白い円形をしたドーム型の礼拝堂が幾つかの集落をなしている。日本の古代人の衣装を纏っている人々が数人往来していた。

次に萬歳樂山頂で見たビジョンは、幾何学的三角四面体が正反重合して光を放射しながら、回転しているものであった。

次に萬歳樂山頂で見たのは、これらのいくつもの大伽藍が重層的に重なっているもので、すべてを同時に見ているようである。しかし、ビジョンであるから現実のものではない。不思議であった。実を言えば、初めて萬歳樂山頂に立ったときのビジョンはこの三角四面体であった。

この伽藍の違いは存在次元の違いなのか時代の違いなのかわからないがハイレベルほど幾何学的になってきているようである。大麻寺に近い伽藍のビジョンは三次元のよりわれわれに近いレベルのもので、三次元の実際の伽藍がこの現象界に建立されている当麻寺や高野山などの大伽藍なのであろう。

ビジョンに過ぎないとはいえ、法身・報身・応身の顕れる、次元の異なる世界に、しかも、個々別々の次元というより、もとよりこれらは虚妄であるうが、互換重合渉入して現象化してい

ると思われた。秘教的に扱われている、アストラル界・エーテル界・ブディ界における加持（互換重合世界）の大伽藍であるのだろう。

さて、本題に入ろう。今、現在、これらのビジョンを通して明らかになっていることは次のことであると思われる。

光り輝くものである法身ビルシャナブツは本不生であり、知覚することはできない。

その光り輝くものから、金剛界・胎藏界の大日如来が現出し、大宇宙をダイナミックに創造する。これらは、あらゆる次元の諸相を経て、このわれわれが住む世界を含めた多次元世界を構成する。これが真言密教でいうところの体・相・用の四曼三密の世界である。われわれはこの密厳浄土である大宇宙体から生み出され、いま、ここに、生かされ生きている。





われわれを含めこの現象界と見えざる世界は、全て、時空を超越したの普賢金剛薩埵の五钴金剛杵によってマカバとトーラス構造の中において金胎两部不二として出現している。

現象界と見えざる世界が絶えず光り輝くビルシヤナブツによって互換重合渉入し、金胎两部不二の立體曼荼羅大伽藍を形成する。魂の浄化をはかりつつ、光り輝くビルシヤナブツと互換重

合渉入する全く新しいのちとして不生の仏心が現出する

この不生の仏心ただ一つを持ってこの物質界を含めた六大（地・水・火・風・空・識）四曼等の曼荼羅を創出する。

全く新しいのちは、本不生の神泉より刻々とあらゆる次元を超えて湧き出づる「いま・ここ」のいのちである。

註・弘法大師空海は『即身成仏義』の「二頌八句の偈」によって次のように即身成仏のプロセスを教示する。

「六大無碍にして常に瑜伽なり、四種曼荼各々離れず、

三密加持して速疾に顕る、重重帝網なるを即身と名ずく。

法然に薩般若を具足して、心数心王刹塵に過ぎたり、

各々五智無際智を具す、円鏡力の故に実覚智なり。」

#### 四、萬歳楽山と般若理趣經

平成二十年五月に起きた中国の四川省の大震災の直後、萬歳楽山頂に登り祈っているさなか、

（誦ずるべし、誦ずるべし、『般若理趣經』を。供養すべし、供養すべし、『理趣經』を。世界を救うは『大楽金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品』をおいて他に無し。）という思いにかられる。理由は、このとき、山頂を歩いているわれわれ一行の列に無数の蝶がやってきて、こちらへ、こちらへと前後を行き来しながらわれわれと同じ行し、道案内をするかのようで、珍しいと思ひながら、俱に歩む。しばらくすると、その蝶の群れが、人々の群衆に映り、また彼らが生活している山間の集落がみえ、彼らは地震でいのちを奪われた多くの尊いいのちが、この萬歳楽山に集められているのかもしれないという強い思いがした。嗚呼、この

景色は四川省かもしれないという思いがした。これは、人ばかりでなく、家畜を含め、森や木々なども含まれていてあらゆるいのちが無数の蝶とともに顕れていたのである。そこで、確かに、心に響いて来る声なき声が、（誦ずるべし、誦ずるべし、『般若理趣経』を。供養すべし、供養すべし、『理趣経』を。世界を救うは『大樂金剛不空真実三摩耶經般若波羅蜜多理趣品』において他に無し。）であった。



## 五、萬歲樂山禪定伽藍ビジョンと登嶺について

萬歲樂山案内図を見ながら萬歲樂山禪定登嶺のコースを紹介しておく。（注…この解説上のさまざまな伽藍の仮称については、「見えざる世界のもの」を小生が名付けたものに過ぎないので、伽藍建造物は実際には存在しない。）

先ず入山登嶺する方向は、順（萬歲樂山を時計回り）に回る。これは山の会が用意した萬歲樂山登山ルートの通りでよい。東から西に向かい北側を通

り戻る再生・新生の順巡コース。

1、東側登山ルート入り口から萬歲樂山の麓までは、六根清浄にして自心を知る「発心」のコース。

2、萬歲樂山麓には仁王門があり、昇竜の門に入る。ここからは六根清浄・如実知自心の「修行」のコースとなる。

3、山頂の手前に大門（四天王門）があり、ここから、本格的に「自己凝視による六根清浄の「菩提」コースとなり、曼荼羅界に入る。

4、第二展望台の所には「東塔（五重塔）」がある。

5、更に進むと「阿弥陀・釈迦・弥勒の三位一体の本尊世界が開かれる金堂」があり、

6、その奥に「金胎両部不二の大日如来主尊の五佛曼荼羅根本大塔」がある。

7、そこを更に西に進むと大樫木

（東日本大震災のときに枯れる）に至る。ここは「西塔（五重塔）」がある。

西塔までは菩提道場である。

8、さらに、その先は阿字本不生門がとなり、奥の院に至る。

ここは発心・修行・菩提・涅槃と辿ってきた修行の最後のプロセス「涅槃」の領域で、生死を超えた阿字本不生門、不生の仏心が開かれる場である。

ここは、物質界ばかりでなく、見えざる世界における諸霊が、本初不生を覺知する場で、分離断片の全くない遍照金剛光り輝くものに導かれる、あらゆる次元の現象が六大法身として互換重合していることを五相成身觀によって自己凝視し覚醒し、意識の变革を起こす即身成仏の場である。

9、光の世界であるがゆえに萬歳樂山は大盤石に座したもう不動明王のご神霊体そのものなれば、マカバの護摩壇が置かれ、無碍自在なるマカバ回転

のトールラスによってアルナチャール山に繋がる。不生に入るには人は過去の経験世界の条件付けから解放されねばならない。人はある意味で日々死んで、日々新たに生まれる本不生のいのちを自覚する。



10、光り輝くものである遍照金剛が指し示す光りの先驗性、阿字本不生の神泉である。

11、全宇宙を生み出す本不生そのものとなる。

12、この不生門から「向下門」にいたり菩薩道が始まり、北側のルートを下山する。これは「降龍門」（慈悲・悲母）であり、加持世界に下生する「新生の門」である。人はこの山で全

く新しいいのちとして生まれかわる。

13、仏心一如となり、世間に出現する。「下化衆生門」である。薬師如来と觀世音菩薩を含む十一面觀世音菩薩・雨宝童子・難陀龍王が擁護したもう加持世界の胎内に入る。

14、この仏化身たる新生仏が胎蔵界曼荼羅世界の胎内に身ごもる場が上記の「御座・要石」の所であるが、要石の重要性は前述の通りである。光り輝く神泉より大宇宙が生み出されるのであり、神々のエネルギーをマカバによってコントロールする場である。

（注..最近はこのコースを八丈岩や巖洞岩を経る、中腹のコースにしている。

次の15以降の説明は初期の頃の下山コースである）

15、更に下降し、辯才天の福德智慧を授かり北門の出口に至る。

16、さらに、萬歳樂山の北側林道を戻ると「放生池」にいたり、施餓鬼



供養をする。

17、そして**八大竜王の龍神**が護る場を通り、

18、**下化衆生のいのちの神泉**がわ

**きいずる清水場**にいたり、再び、**自然**

**生命**として人類を含めあらゆるいのち

が、今度は不生の仏心のまま**活如来**と

**して新復活**しそれぞれの世界に刻々の

いのちを生きたこととなる。

以上、萬歳樂山禪定登嶺のコースについてその意義にふれた。

法圓寺では萬歳樂山登嶺禪定を年二回程実施している。



## 六、萬歳樂山に天照皇大神が顕る

平成二十二年の五月に萬歳樂山に不生禪と理趣經を供養するため、登ってみると、これまでの登山ルートにいくつかの新しい道が付けられていて、その中で「八畳岩」・「巖洞岩」に続く道が切り開かれていた。これは、冬に雪の中を萬歳樂山に登った当時の国見の町長さんたち山の会の人たちによって新たに大きな岩をいくつか発見し、萬歳樂山の民話や古老たちが言う八畳岩や巖洞岩であろうと、標示と小道を付けてくださったものだったが、この日は、修行のルートを変えて、この八畳

岩・巖洞岩なるもののコースをたどっていた。いくつかの巨大な岩は見つけたが、想像しているような八畳岩という舞台岩は

わからない。すると、ひとつの岩に目が止まった！なんと！その岩に「岩に腰をかけている神像」の姿がくっきりと浮かび上がっていたのである。（小生のビジョン）。岩肌の模様にしてはその姿はくっきりしていて明らかに岩の色とはまた異なっていた。かと言って人為的に刻み込まれたり、描かれたりしたものでもなかった。どんなお姿かというと、上古時代の神官が着ているような簡素ではあるが純白のゆったりした服装。髪は真っ黒で両耳の下あたりで髻を結っている。若いようには見えるがヒゲあるようにも見える。岩に腰をかけ、前に杖（杖に見えたが太刀であったかもしれない）をもち、前方の或る方角をじつと見ておられる。内心、このお姿は十五年ほど前にもこの萬歳樂山でカモシカにであったおり、そのそばに立つ弁財天のビジョンにあったが、その姿に服装や髪型は似ている。

だが、今回は威厳に満ちているが、ものの哀しげであるのが気になった。寺に戻ってから、仏像図展の類を調べて、

「天照皇大神」であった。小生、未熟ながらも慈雲尊者飲光の雲伝神道灌頂を授法している。金田元成・青木融光大阿闍梨から授かった。二度灌頂を授法しているので、あながち神道と無縁とはいえなかった。ちなみに、弘法大師の天照皇大神と大日如来は同体とする、嵯峨天皇直伝の両部神道である。

さて、萬歳楽山と天照皇大神との関わりを紐解く天啓はこれにとどまらない。前にも記したとおり、長谷寺と興喜山の縁起なるものが、現実にはこの萬歳楽山においては、ビジョンとして与えられている。天照皇大神ともなるとその脇士は春日大明神・八幡大明神となるが、すべて深い縁である。この三神が一体となって法圓寺の境内の手水鉢に立ち上がった水像の正体はこの

天照皇大神でもあるということでもある。



（大和総本山長谷寺「雨宝童子」）



（大和総本山長谷寺「難陀龍王」）

萬歳楽山の巨石信仰の深さと壮さを伝える資料があればよいのだが、そのようなものは見えざる世界で秘匿とされているとなると、出てくることは全く無い。「八畳岩」「巖洞岩」など地震避けの民間伝承に残る岩の名前はこういった古い時代の巨石信仰の名残を

伝えているのかもしれないが・・・。

「大日岩」は十年ほど前に松浦さんという古老が岩に彫った大日如来と龍であり、最近の名称である。むしろここは大地震を起こしたオオナマズを抑えるために、皇大神の命を受けた鹿島明神、愛宕権現らが投げ入れた磐座（皇大神の座岩）『要石』という大盤石を象徴し、萬歳楽山そのものが大盤石すなわち天照皇大神の磐座に相当するが、この山には天照皇大神の磐座を暗示する「八畳岩」・「巖洞岩」が古くからすでに民間に伝承されてきたと思われる。

だが、人々の信仰は、せいぜい、地震よけの呪いぐらいのものでしかなく。

今ではそれも薄れている。

まして、世界を統べる神が降臨する山だなどとは誰も思っていないのだ。今日





まで、少しも靈妙不可思議な山として大切に扱われてきたという徴は微塵もないし、その形跡も全くない。だが、あなどるなかれである。この萬歳樂山は、「本不生」により創造と破壊が司られている世界規模の山であることを、刻々に示しているのである。

この萬歳樂山は、本来、世界中のあらゆる人類の神官を招集し、今上天皇陛下がその神事・祭事を御主催あそばされるべき神格の御山であると確信している

萬歳樂山が示すのは、この山が、まさに天皇陛下ご自身が司られて御神事が執行されるべき主祭神天照皇大神下生の山であり、それによってこそ、初めて、世界平和・万民豊樂・地球安寧のために、神々に導かれて神事が全うされると信じて疑わない。この神事に因る祈祷によってしか、地球の滅亡を救う祈祷は成就しないとすら思っている。

る。 ちなみに、萬歳樂山に登られた方は、耳をすましてごらんなさい。萬歳樂の雅樂の調べが聞こえ、安寧を祝福する迦陵頻伽の舞にまみえるかもしれない。

#### 七、天皇皇后両陛下 東日本大震災被災者見舞われる萬歳樂山の神事



（注・・以下は平成二十五年当時の内的なプロセスによる記録であり、その抜粋である）

「平成二十五年七月二十三日午後一時三十分、今上天皇・皇后両陛下ご臨桑折の時に、小職路上の片隅で両陛下の御車輛がお通りになるのを一般の方々

とともにご歓迎申しあげるだけでしたが、萬歳樂山からの内示を既に頂いていたので『萬歳樂山・半田山・アルナーチャラ山 本不生浄土曼荼羅』を首にひっさげ両陛下をお出迎えし、お見送り申しあげました。きっと、今上天皇・皇后両陛下に『萬歳樂山・半田山・アルナーチャラ山 本不生浄土曼荼羅』をご高覧賜ることが適ったと信じております。

奇しくも萬歳樂山の大神事を両陛下祭主に奉り、如来のおよび弘法大師のご加護と教導を被りながら導き、不肖ながら龍雲好久、永いこと希求してまりました靈妙不可思議なる萬歳樂山の大神事を「いま、ここで！！」はからずも奉修することができました。この瞬間に、『萬歳樂山・半田山・アルナーチャラ山 本不生浄土曼荼羅』に大神事権現の開眼がなされ、地球の擁護と人類意識の変容と新文明創発のスイツ



チが入ったことになります。

その折りの、大聖者祈願文とを以下に掲げます。

【今上天皇皇后両陛下御来桑萬歳樂山大神事】

奉修 今上天皇 玉体安穩 祚長遠

世界平和 萬民豊樂 惑星地球安穩

人類意識変容而創発新文明

平成二十五年七月二十三日午前 畏

れ多くも 日本国今上天皇・皇后両陛下、福島県伊達郡桑折町に御来臨あそばされるは、『半田山・萬歳樂山・アルナーチャラ山』の大神事のほかならずここに、貧僧不肖の仏弟子龍雲好久、

両「両陛下御来桑の間、朝日山・大光山・補陀洛山三山の曼荼羅壇を開壇申し上げ奉り 三神一体の主尊すなわち『ブッダ・メタトロン・エノク』  
『大日如来・阿弥陀如来・弥勒如来』  
『天照皇大神宮・春日大明神・八幡大権現』  
『朝日山阿弥陀仏・大光山

阿弥陀仏・補陀洛山阿弥陀仏』をはじめ本初不生の浄土曼荼羅諸尊を仰ぎ奉り、惑星地球安穩・世界人類意識を變容し、不生の仏心たらしめたもうて寶祚長遠・世界平和・萬民豊樂・仏日常輝・常転法輪。殊には、惑星地球救済・人類意識変容・不生の仏心開顕・新文明創発を祈念し奉る。



【不可思議なる御はからい】

①「天皇皇后両陛下が平成二十五年

七月二十三日に桑折に献上桃の視察に

お出ましになられる。」との情報が檀家

から得て、内心、これは見えざるもののただならぬ配慮を感じ、肅然とする思いであった。

というのも、萬歳樂山の大神事は天皇皇后両陛下がお出ましになられて初めて成就するものという思いがあったからだ。阪神淡路大震災以来、萬歳樂山との関わりの中で、適わぬことはいえ、いつしか、陛下にご行幸いただき、

萬歳樂山における大神事が成就なされることを二十年ほど密かに念願していたからだ。しかし、陛下が、名も無い一宗教者の神事に、しかも仏教的な行事に直接関われることはないであろう。単に「萬歳樂」というだけで、天皇陛下に実際にご来駕いただく根拠にはほど遠く、全く叶わないことである。

だが、奇縁により萬歳樂山に関わって以来、東日本大震災以降、その震災被災者の方々の慰霊と復興祈願は、この萬歳樂山のもと、陛下に行幸賜り、

ご誓願を頂くことにまさるものはない  
と言う思いはつのるばかりであった。

ましてや、今後、懸念されている関東  
地方や東南海中部巨大地震などの脅威  
を減じ、日本国のみならず惑星地球の  
大危機からの救済と人類意識の変容、  
並びに新文明創発の曙となるには、陛  
下において余人のできることはない  
と山自体から教わっている。

とはいえ、現実的に陛下をお招きで  
きる機会も力も小生には全くない。

弘法大師空海であるならばこうした  
ことは、現代においてもこのような大  
神事は、即、陛下に申し出られ、ご奉  
修されたであろうに……。このよう  
な大それたことを念じていても、実際  
には何もできない。只、自分が行える  
ことをただひたすら行うのみしかない  
と観念し、日々、黙祷を捧げ、半田山  
・萬歳楽山・アルナーチャラ山。朝日  
山・大光山・補陀洛山。ブッダ・メタ

トロン・エノク。アミー・マイトレイ  
ヤ・ブッダ。天照皇大神・春日大明神  
・八幡大菩薩これら三位一体の神々に  
祈願していた。

## ②「萬歳楽山 祈禱の大神事」を、

平成二十五年七月二十一日から奉修。

朝日山法圓寺・大光山正徳寺・補陀  
洛山歓喜寺の三本尊を勧請して、法圓  
寺と歓喜寺で単独奉修させて頂いてい  
た。

## ③天王皇后両陛下 御来福

平成二十五年七月二十二日。

福島駅近くのホテルで会議があり、  
それに臨もうと歩いていたら、何やら  
大勢の人が駅周辺に整列している。駅  
の方から歓声が上がリ、何事かと、そ  
ちらを向いたら、天皇皇后両陛下が福  
島駅からちようど降りてこられ、ここ  
らの方向に歩いてこられるところであ  
った。陛下をお迎えする一般の方々の  
後列で、陛下ご来福のご様子をまのあ

たりにさせていただいたのだ。

この日、陛下は萬歳楽山の麓の吉川  
屋にお泊りになられるという情報をあ  
る住職から聞き、（なんと、今宵は陛下  
が萬歳楽山の麓におられる！萬歳楽山  
の神事である復興成就を祈る機会はこ  
のときをおいてほかにない！）若輩な  
がら、心を直し、意を決して、陛下が  
福島におられる間、本堂に籠もり誓願  
成就を祈願することに意を固める。

## ④堂に籠もり萬歳楽山大神事を奉修

平成二十五年二十二日と二十三日は、

誰もとりつがぬように頼み、法圓寺と  
歓喜寺に交互に参り、ひたすら籠もり、  
祈念を凝らしていた。二十二日の夕暮  
れ。両陛下は萬歳楽山の麓、吉川屋に  
おられるであろうかと思ひながら、歓  
喜寺の鐘楼に登り、祈願の梵鐘を打し  
ていた。すると、突然、雷鳴が轟き、  
しばらくして、激しい風と雨。雷鳴が  
天地四方に鳴り響きだす。稲光は萬歳

楽山・半田山そして小生の頭上を中心  
に右回りに巡っている。その様はまる  
で天空を九頭龍が激しく巡っているよ  
うであつた。嗚呼！まさに、両陛  
下が在すこの瞬間に天龍たちが歓び、  
大神事を成就なされようとしているか  
のようであつた。

後にも先にも、これほどの天空の雲  
の流れと雷鳴がいくつも轟き、稲妻が  
走る景色は見たことがない。荘厳であ  
つた。

⑤ 天皇皇后両陛下御来桑の砌、小生  
萬歳楽山曼荼羅を提げるつつ、両陛下  
ご歓迎の町民の列に加わり、大神事成  
就を祈る。

平成二十五年七月二十三日、  
昨夜来の豪雨はすっかり止み、天候は  
回復し、晴れる。小生は法圓寺の本堂  
に籠りつきりで祈禱していた。陛下に  
直接お目にかかることは、愚僧ゆえ、  
望めそうもない。それでも町の関係者

の知り合いを通じて、非接触ながら、  
陛下ご神事の秘事を密か成就できるよ  
うはからっていた。

この日の早朝、本堂で拝んでいると、  
その方から「陛下は新潟で自然災害が  
起きたので、桑折にお寄りにならない  
でそのまま那須の御用邸におもどりに  
なられる。」との知らせが入った。少し  
でも陛下がこの地におられる間だけで  
はと、その知らせには構わず修法し続  
けていた。しばらくして、また知らせ  
が入った。「両陛下は午後1時に吉川屋  
をお出になられて桑折町西0町通りを  
お通りになられ、国道四号国道に出て  
福島駅に向かわれる。」との変更の知ら  
せであつた。それには、構わず拝んで  
いると、内心で、声なき声のようなも  
のが響いてきて、「この時をおいて大神  
事は成就されない！お前がお出迎えし  
てこの曼荼羅をご提示しながら、両陛  
下の一瞥たろうとも、御拝謁申しあげ

なさい。」という強い指示があつた。

弘法大師以来、師資相傳の如法衣を  
纏い、祈念を凝らしつ、両陛下が前を  
お通りになるのをお待ちした。小生の  
そばにはある檀家さんのお子さん達も  
も一緒に晴れやかであつた。

そして、今上天皇・皇后両陛下は間違  
い無くこの曼荼羅に目をおやりになら  
れた。その瞬間、この大神事は光り輝  
くものに届けられたと確信した。







九、「光り輝くもの」から『紅頗梨秘法』を授かる

（歓喜寺の本堂にある正徳寺阿弥陀仏の前で祈っていたときであった。突然、不可思議な観想が起こり、それが、後になって、空海秘伝の『無量壽如來供養作法次第「紅頗梨秘法」』であり、ひいては「即身成仏・五相成身觀」を示すものであった。）

いつものように、歓喜寺本堂で、享保六年造立の正徳寺本尊阿弥陀如来の御前でわずかばかりの阿弥陀仏の真言をお唱え、祈念を凝らしていたときのこと。突然、眼前に、真っ暗な虚空が広がり、そこにぽっかり浮かぶ碧き寶球が顕れた。それは実に美しい瑠璃色に輝く寶球であり、ちょうど、宇宙から見た地球のようであった。

内心、驚きながら、顕れるままに、閑かに、黙想を続けていると、やがて、その地球を白い雲が海をなすがごとく

次第に包み込み、地球に似た寶球をすっぽりと覆い尽くした。

すると、その雲海の雲間から、ところどころで稲光が走っている。やがて、その閃光は、まるで、地球の中心から、四方八方に放射されて、あらゆるものを貫き通す強い光となった。しかし、その光は決して眩しいものでもなく、やわらかな光であった。生気みなぎり、躍動する偉大なる光であった。

やがて、そのなかの一条の光が、緑がかった黄金の龍体へと変化し、力強く流動する。地球の中心から放射する光柱に沿って8の字を描くように流動している。旋回しながら、上昇し、下降する龍のようであったが、よく見ると龍ではなく、無数の光の束であった。それらが自転・公転しながら、互いに全体として統合され、ある方向へと向かっているように見える。

それは、また、密教の法具である五

鈇金剛杵を連想させるものであった。

その五鈇杵の芯、則ち、真ん中に地球である寶球があつて、それを中心に縦横無尽にエネルギーが流動している。雲海の中で光が走り、五鈇杵が出現し、その五鈇杵は縦横に带状の光となり、八輻の輪寶羯磨のようでもあった。そのまま、八葉の蓮華のようでもあった。

しかし、それは、もっと強大でダイナミックなエネルギーがはたらいいて、まるで広大な宇宙から下降する三角四面体の火炎と広大な宇宙へと上昇する三角四面体の火炎が双方逆回転しつつ互換し重合しているものであったのだ。

やがて、光の放射状の芯から、一条の光がまっすぐに小生のところへと伸びてきて、私の頭上から体内に流れ込む。凝視していると、今度は、その光に導かれて、小生自身がその光の本体である地球の中心へと吸い込まれてい

く。

その中心に近づくにつれ、水晶のような清らかな美しい球体が顕れた。その球体の芯のほうから、神々しい光、麗光のようにやわらかで、どこか懐かしく、穏やかで落ち着く、真冬の東の空の暁光のような薄紫がかった赤色の透明な球の光となり、更に近づくとなんと、その中心に「寶冠をかぶった、まさに大日如来」が顕れ、輝いておられる。

やわらかな光ではあるが、しかし、神々しい光輝である。畏れつつも、心を凝らすと、やがて、その大日如来の御手の印相が「彌陀の定印」であることに気づく。そのままじっと凝視を続けていると、突然、視界が開け、天地一切の森羅万象、万生万物の生きとし生けるものの中心に十方からその如来の光が流入し、満ちあふれ、包みこまれている世界が展開し、光り輝く大日

如来が、個々のいのちを刻々に現象化させていることを親りにした。その遍満した如来の光が、局所化された個々のいのちに阿弥陀如来として出現し、それは同時に背後に遍在する阿弥陀仏の光と互換し重合しながら、時々刻々、決してとどまることなく阿弥陀如来の無量なる慈悲の光が、創造の源泉である大日如来そのものとやはり互換重合渉入しながら、潜象・現象が一つの球光となって法輪を転じ、万象万物に浸透しているいのちそのものであることを親りにする。

嗚呼、これこそが、長い間、もどめてきた佛陀親説の本不生の実相。弘法大師が示した阿字本不生に違いない！この、黙想は、こうして記述すると、すごく長いプロセスのようではあるが、実際は、ほんの数秒の出来事ことであつた。

この導きにあつて、まさに、これは、

危機に瀕した地球上の大転換を導く如来性が（いずれも三〇〇年前前に造立された三体の御本尊を通して）万象万物の救済のヒビキ（加持感応）を発せられていることを確信した。

歓喜寺でこの黙想を頂戴した後、法圓寺に戻つてみると、こともあろうに、偶然ではあるが、傳・弘法大師の「紅玻璃色阿弥陀如来供養次第」の文献を初めて目にした。実は他のものを探していて、棚から落ちてき他資料で偶然その挿入図をみたのである。

その図を見てハツとした。内的ビジョンに通じるものがあつたからである。それで、初めて、自分が内的に感受させて頂いたものが、この「紅玻璃色秘法」なるものであったことを理解したのである。





## 十、「無量壽如來觀行供養儀軌」を授かる

### 【心秘授の経緯】

平成三十年に入って、たまたま不空三蔵訳の「無量壽如來觀行供養儀軌」に遭遇した。これも前後に何の脈絡もないひよんなことからの出来事であった。驚いたことに、この中に、前述の「紅玻璃色秘法」と同文の文章があり、しかも、「無量壽如來觀行供養儀軌」は密教の「十八道念誦次第」の根拠となっているという添え書きが示されていた。ようやく、ここに至って、見えざるものの手引きされる真意がこの「紅玻璃色阿彌陀如來供養法次第」にあることを知る。(あまりにも稚拙ながらそう理解したのである……)

黙想のビジョンを示したこの正徳寺の阿彌陀如來が造立されたのは、桑折の高徳の僧・無能上人が遷化されてちようど二年目、三回忌の年、享保六年

であった。その当時の建立施主は角田三左衛門と墨書きしてある。彼は正徳寺四世團秀上人や無能上人や不能上人の御師匠である大安寺良覺上人の住まう浄土宗大安寺の筆頭檀那であるようだ。奇しくも、平成三十年は、正徳寺改め無能寺の第一祖無能上人の三百回忌の御遠忌にあたる。ちようど、その無能寺で無能上人の御遠忌法要が行われている。

まさにこの時期に、紅玻璃秘法をまのあたりにさせて頂いたのであるから、不思議な因縁を感じざるを得ない。小生としてはたまたま偶然であったが、見えざるものの何らかの思し召があつたのであろう。

尊くも勿体ない如來の思し召である。

### 十一、大地震や氣候變動、

#### 新型コロナウイルス感染の苦悩

令和に入り、新型コロナウイルス感染症の問題は世界中を席卷し震撼させた。今まさに、その深刻な問題の渦中にある。しかも、大震災から十年が過ぎてなお、当地は、その余震の影響を受け、令和三年二月十三日午後十一時〇七分福島県沖発生の震度六強の地震が発生。法圓寺も歓喜寺も被災したが、幸い、三本尊をはじめとする小生の修法の諸尊も無事であった。いま問われていることは潜象宇宙と現象宇宙が一体であることを感受できなくなったわれわれが如何にして潜象と現象を体現しうるかにあるように思える。果たして、この紅頗梨秘法が、僧俗を問わずその体現の一助たり得るのか。小生は如來から指し示され頂戴しているものをどのように人類にお伝えしたらいいのか。全く、不明である。日々、深刻な世界情勢の報道に触れて度に、おのれの無能力さに、ただ、茫然自失の日

々を過ごしている。如来に詫びるとい  
うより、お力をおかしくだされりなら  
導き給えと、悶々とした日ばかりが過  
ぎている。



十二、ボロブドール遺跡はブッダの内  
観を人類に指し示し、ひとり畔の内観  
をうながしている。

### その一 彌陀の内観

いつであつたか、ある年のこと。正  
月早々、内観を希望される方がいて、  
お世話をさせて頂いた。

内観法というのは、種々あるが、こ  
こでは大和郡山の吉本伊信という浄土  
真宗の恩師僧のもとでご伝授頂いた

「内観法」を元にした「集中内観」に  
よる自己凝視法である。この吉本式内  
観法は、かなり普及されたものであつ  
た。今日では、様々な宗教関係者の内  
観・精神医療関係者の内観療法・学校  
関係者の内観・受刑者を扱う刑務所に  
おける内観・企業の社員内観など様々  
な方面で活用され、世界中にこの内観  
法が普及している。各界の専門の研究  
者や内観研修所主催者による内観学会  
はもあり盛んである。

集中内観は三尺四方の衝立（法坐と  
いう）の中で、ひたすら自分自身と向  
き合う。

1、世話になったこと。2、して返し  
たこと。3、迷惑をかけたことを自己  
を見つめる「歎」として、父母を始め  
縁のあった人々に対し、ひとりひとり  
の人間関係を、0歳から今日まで年齢  
を区切って、自分がどのようなもので  
あつたかを繰り返し振り返る。

二時間おきの面接で面接者に自分が  
調べた内容の一部を聞いていただく。

一日およそ十五時間半、七日から八日  
かけて集中的に自己を見つめる。これ  
までの縁のあった方々に対する自分を  
ひと通り調べるには、どうしても一週  
間は必要である。それでも、本当の内  
観になるのは五日目頃からで、それま  
ではたいてい内観でなくて外観でしか  
ないことが多い。そのため、最初は  
「こんな事やっていて果たして何にな  
るのだろう」という強い疑念と拒否感  
に悩まされる。しかも、トイレや入浴  
以外は全く席を立てないので、身体が  
慣れるまでイライラし、苦痛である。  
それでも内観し続ける。朝目覚め夜床  
についていても、絶やすことなく内観  
を行う。無論、外の世界とは一切遮断  
である。上記の三つの尺度でひたすら  
自己を見つめること以外は全て禁じら  
れるので、座禅とか呼吸法とか瞑想法

とか密教ヨーガ観法とかいうような特定の宗教儀礼や作法すら不要とされ排除される。

このためか、内観は特定の宗教行為には当たらない普遍的なものとして世界中に受け入れられ、普及されてきたものである。

内観道場は寺院や教会で扱っているところは少ない。宗教施設よりも心身医療関係者や企業家、一般の内観体験者が医療機関や企業施設、一般住宅を開放して内観の道場を開設している事が多い。宗教者達は自分固有の内観法を有しているからであろう。では、この内観は宗教的に皮相なのかというと全く逆で、例えば禅の達人であつても、密教の大阿闍梨であつても、念仏行者であつても、シスターであつても、大教祖であつても、まして判事であつても、この内観の前には、自らの悪行の限りを自覚すればするほど、あるが

ままの自分の姿を知つて愕然とせざるを得ない。一切の仮面を剥ぎ取るのである。もちろん、これは、それぞれの信仰や宗教的経験の深さにもこの内観は通じる。なぜならあるがままの自分屠蘇の人生を凝視するからである。

実は、いつもの様に正徳寺の阿彌陀如来の前で端座黙想しているときであつた。如来が突然、語り始められるのには、(本尊として造立された背景には、非常に厳しい念仏三昧にあつた浄土宗の無能が往生して二年目であつた。その恩徳を偲んで造立され阿彌陀如来なのだが、実は、無能上人の行は浄土真宗にも密かに受け継がれていた厳しい念仏行「往生はいかに」と問う「身調べ」に通じているものである。)と。これを聞いてハツとした。この阿彌陀如来は小生が雑事の忙しさと、ほかの自己凝視のあり方を理由に、ここ十年ほど開設しなかつた内観を開設しなければなら

ばならないと仰せになられた気がしたからだ。折しも、その日、法圓寺に戻ると、「吉本伊信先生ご夫妻の写真がひよつこりてきました」と妻が小生に見せたのである。吉本伊信の内観の原点がこの浄土教に伝えられていた「身調べ」である。「身調べ」というのは、今自分が死んで、さて、自分は彌陀の浄土に行けるものなのか、それとも地獄に真つ逆さまなのか、自分のこれまでの生きざまを死を賭して厳しく見つめるもので、その為、不眠不休、断食を続けて、念仏を唱え続ける。つまり往生念仏三昧に入るのである。この世に戻れない死者が浄玻璃の鏡の前に立たされるのである。

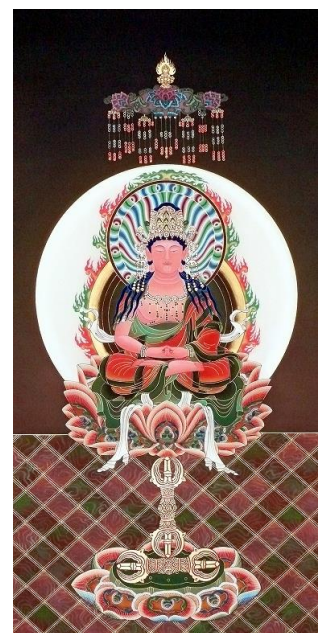
しかし、この内観は、必ずしも吉本式だけをいうものではない。なぜなら、吉本内観を紹介されるだいぶ前、昭和四十五年二月に、小生は東京都清瀬市にある円通寺事相専門道場で青木融光



大阿闍梨のもとで修行中に、この内観を体験したことがあったからだ。もちろん、加行の課題にこの内観はなかったのも、誰でも体験するというものでもない。その内観は不異に起きた。真言密教の加行中、「不動念誦法」で陀羅尼を誦じているときに、突然、体験したものであった。自分のこれまでの生涯が走馬灯のように、しかも克明に、黙想している眼前に映し出され展開する。誰が見ているのか、自分自身の生涯が母の体内からこの世に出生し、今日に至るまであらゆる状況が内面的にも外面的にもそのまま映し出されるのである。それを陀羅尼をとえつつづけるながら、ずっと内側から観続けていると、突然、両親の御恩ばかりか、すべての関わりが自らを慈しむ慈悲の響きとなつて全身全霊を包み込み、その慈悲の全きありがたさに感無量とならざるを得なくなる。それに引換え、おの

れの所業のなんとあさましさと愚かさ、とうとう、進退窮まってしまうのである。だが、絶望の淵にたったとき初めて如来の慈悲の温もりだけが感ぜられて、感極まる。滂沱たる涙にむせぶ。

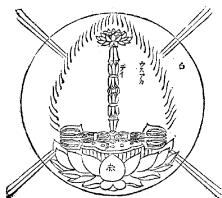
ところで、アミリタ（彌陀）の不可思議が小職の周りに今このようにしきりに示現し続けているのはなぜなのだろうか？終末がくるのか？いや、終末などと言うまでもなく、人は否応なく死ななければならぬ。その時に、「往生はいかにと、自らに問うことになる。」そのことを如来はお示しになられておられるのだろうか。死んだら終わりじゃないと……



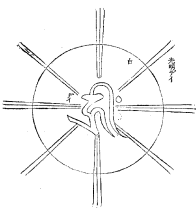
### 十三、傳弘法大師

#### 「紅玻璃秘法」の内観

#### ●道場観（傳弘法大師）



面前において安樂世界を觀ぜよ。瑠璃を地となす。功德の乳海あり。その海中において「活キリク」字を觀ぜよ。



大光明を放つ。紅玻璃色の如し。遍く十方世界を照らす。その中の有情その光に遭う。苦を離れること得ざるなしということ無し。その字輪變じて独股となる。首の上に微妙開敷せる紅蓮華あり。横の五股の上に立つ。即ちその華變じて無量寿如来の身となる。寶蓮華満月輪の上に在す。五智の寶冠をつけて定印に住したまえり。身相紅玻璃色なり。頂上より紅玻璃の光を放つ。無量恒沙の世界を照らす。皆悉く紅玻璃色なり。諸々の聖衆のために前後に圍繞せられたまえり。

●入定 (傳弘法大師)



即ち觀自在菩薩の三摩地に入て目を閉じ心を澄まして自身の中で觀ぜよ。円

満潔白にしてなおし満月の仰いで心中に在るが如し。淨月の上において「活キリク」字を想わば大光明を放つ。その字變じて八葉の蓮華と成る。蓮華臺の上に觀自在菩薩います。

相好分明なり。左の手に蓮華を持ち右の手開敷の勢いを作す。この思惟を作せ。一切有情の身中にみなともにこの覺悟の蓮華あり、清淨法界にして煩惱に染ぜられず。

蓮華八葉の上において各々如来います。定に入りて結跏趺坐す。面 觀自在菩薩に向かう。頂に 圓光を佩びたり。身 金色の如し。光明 晃曜せり。

即ち想えこの八葉の蓮華漸く舒び漸く大にして量虚空に同じ。即ち この思惟を作せ。この覺華をもって如来界会照燭して願わくば 広大の供養を成ぜん。

觀じ了て 定中次の真言を 誦じて

オン ソハラ ハンドマト

心この定を移さずして 則ち無辺の有情において深く悲愍を起こせ。

この覺華をもって照燭の蒙るは苦煩惱において皆悉く解脱して觀自在菩薩に等同ならんと。

蓮華漸漸收斂し量己身に等し。

想い己て 誦ずるべし

オン ソウギヤラ ハンドマト

●発願 願一切有情 (傳弘法大師)

心の前に 觀念せよ。無量寿佛 相好圓滿して 壇中に在ますと。また 想え。本尊の心月輪の上に 秘密真言あり。我が心月輪の上にも また 秘密真言あり。本尊念誦したもうときは。

本尊の御口より出て 我が頂きより入りて 我が心月輪の上に列れり。我れ念誦するときは。我が口より出て本尊の御足の下より入りて 本尊の心月輪の上に列れり。かくの如く相續して絶えず。一一の字より大光明を放つと。

●結定印

則ち 観ぜよ。身中の菩提心 皎潔圓明にして 猶し 満月のごとくと。

思惟を作せ。菩提心の體は 一切の物を離れ 蘊界処を離れ、及び 能取所取を離れ、 法は無我なるがゆえに

一切平等なり。心 本不生なり。自性空なるがゆえに。

即ち 圓滿清淨月輪の上において活キ  
リク字門を想え。字より無量の光明を  
流出す。一一の光明 道において 密  
嚴淨土（極樂世界）を觀成す。

聖衆 無量壽佛を 圍繞せり。



#### 十四、「ブツダの瞑想」

##### 自己凝視・如実知自心

（クリシュナムルティの瞑想録 三）

Chapter I から）

■ 瞑想は世俗からの逃避ではない。

それは孤立的で自己閉鎖的な行為ではなく、世界とそのあり方を直視し、理解する自己凝視によって起こるものである。

世間は衣食住に依存し、飽くなき快樂の追求に明け暮れているが、それには必ず大きな悲嘆を伴っている。

瞑想はそのような世界を直視する行為であり、その凝視を通して、自己は明晰になる。そのとき、この世は意味を帯び、天と地はその本来の美を不斷に開示する。その喜びには快樂の影を宿さない。

このあるがままの自己凝視からおこ

る瞑想こそは、緊張や矛盾、葛藤、自己満足の追求、力への渴望などから生まれたものではない、全ての行為の源泉・本不生から湧くものである。

■ 真理は決して過去にはない。過去の真理は記憶の死灰である。なぜならば、記憶は時間の中にあり、昨日の死灰の中には何の真理もないからである。真理は現に生きたものであつて、時間の領域にはない。

■ 一体に人はなぜイデオロギーや信念に固執するのであろう。この世界における果てしない信念や信条に依存し、その主張を繰り返す背後には、日々の生活、悲嘆、死、あるいは砂をかむような生の無意味性に対する不安や恐怖が潜んでいる。あらわな現実を前にして、あなたは理論や信念・あるべき姿などを考案する。そしてそれらは、



経験を積み重ね、いよいよその信念や信条に磨きをかけ、精妙さを増し深みを帯び、重みを加えながら確信となり、やがて、数百、数千年にわたるプロパガンダを経るとその教理や信条は必然的、かつは愚かなことに「真理」として確立されていると信ずるのである。

だが、いかなる信条をかかげ、大いに闊歩しようとも、その根底に日々の生活、悲嘆、死、あるいは砂をかむような生の無意味性に対する不安や恐怖を覆い隠すものであるならば、自己欺瞞に過ぎない。

しかし、もしもあなたがいかなる教義も仮定せず、身につけてきたあらゆる信仰やドグマの鎧を棄てたならば、そのとき、あなた自身があるがままの現実と対峙するしかなくなる。

「あるがままの現実」とは、思考であり、快楽であり、悲嘆であり、そして死の恐怖である。競争や貪欲、野心や

力への欲望、追求に満ちた日常生活の構造を理解するとき、あなたは理論や救世主導師といったものの愚劣さを悟り、あなたの悲嘆や、思考が作りあげてきた全構造に豁然として終止符を打つ。そのような自己欺瞞の構造に貫入し、それを理解することが瞑想である。

この瞑想によってあなたは、この世が迷妄ではなく、人間が他者との関係のうちに構築してきた恐ろしい現実であることに気づく。

あなたの悟らなければならないことは、組織宗教や宗教団体における儀式をはじめとする諸々の付帯物を背景にしたような概念化された宗教の信条や教理やヴェーダーンタの理論ではなく、赤裸々な現実なのである。

人が恐怖や羨望、悲しみに突き動かされることなく、解放され、自由であるとき、そのときはじめて精神は安らかで静謐である。そのときはじめて精

神は日々の生活のうちに刻々に真理を悟り、さらにはすべての知覚作用のあなたに飛翔できる。そのとき見る者で見られるものという二元性は終焉する。

これらすべてのかたに、現実の混乱や闘争、虚栄や絶望と関わらない、始めも終わりもない流れ、精神がついにとらえられない不可測の運動がある。

十五、釈迦牟尼世尊のみに光り輝くもの  
の頭れ覚醒をうながす「五相成身観」

#### ●ボロブドール寺院遺跡と萬歳樂山

萬歳樂山を通じて、見えざる世界の  
大伽藍がこの現象界の地球上に出現する  
潜在の阿字本不生曼荼羅であり、須弥山と互換重合する相似象の靈峰である  
ということを『ブッダ親説』と『般若理趣經』が教示する「本初不生」をもとに導かれてきた。

小生が「ボロブドールの寺院遺跡」

を意識するきっかけは、梅尾祥雲の『理趣経の研究』のなかで触れられていたからだが、その背景には、前述するように平成二十年頃から頻繁に出現する氷像とくに三角四面体のような幾何学的造形が自然現象として繰り返し示され、それが、大地震、異常気象による気候変動に伴う自然災害や新型コロナウイルス感染症、更には国連憲章を反故にするロシアのウクライナへの軍事侵攻と核使用の脅し。中国や北朝鮮に関わらず独裁政権による常軌を逸した人間支配。イスラエルとパレスチナの宗教問題。まるで未熟なものが実効支配する権力構造の悪徳極まりないあり方。こうした地球全体の問題と秘蹟がまるで連動している。

いまこのときにこのような自然現象を通じて示そうとしているものは何か。

これは見えざる世界からの何かがある

という思いに至らざるを得なかった。

だが、小生は、こうしたものを広く世に問う力は無い。あまりにも貧弱である。万人に問うほどのものはもともと持ち合わせていない。

それにもかかわらず、では、なぜ、小生の近辺でかかる不可思議が起こり続けているのだろうか。これらのものは単に思い込みに過ぎないのだろうか。

無意味なものでしかないであろうか。むしろ、あまりの愚鈍性をもっと案じてるのは自分自身ですらある。なにも、天の意思が宇宙規模の警鐘を鳴らすには小生の近辺に依らなくとも、もっと効果的で相応しいところは沢山あるあるだろう。そこに起きず、ここに起きてるということを特別視していること自体そもそもおかしいのだろうか。

しかし、ここに、全く思議の及ばぬ現象が起きていることは事実である。

## ●ボロブドール寺院遺跡立体曼荼羅

令和五年五月に法圓寺の古い埃まみれの「大般若経典六百卷」を調べようと経典を手を取っていたときであった。ふと、何気なく（ボロブドールの遺跡の模型は出ているかもしれない）という思いがして、すぐに、ネットを調べた。すると、まさに、探していた当のものに遭遇したので、躊躇せず、取り寄せた。実を言うと、『理趣経の研究』にあるボロブドールの遺跡の模型はなにものかと、これまで数年、何度も探索かけて探していたが、出てこなかったものである。ほとんど諦めてもいた。それがこの時期に手に入ったのである。手のひらに載るほどの小さなものではあるがよくできていて、ボロブドールの古い設計図に基づいて作られている。まさに、天与のものであるろう。



小生がボロブドールの寺院遺跡に深い関心を寄せたのは、前述したように、梅尾祥雲の『般若理趣経の研究』のなかで詳しく論ぜられていたからである。

まさしく、萬歳樂山頂での不可思議な寺院のビジョン、その萬歳樂山と理趣経の不可思議な因縁、更には法圓寺における不可思議な氷像の出現などを探っている過程で、ボロブドール寺院遺跡の研究論文の幾つかによって、一連の不可思議な経緯が非常に深い因縁でリンクしているように思われたのである。

更に驚いたことは、令和五年五月、

ちょうど、天皇陛下がジャワのボロブドールの遺跡を訪問されたというニュースが流れたことであつた。まさに、青天の霹靂であつた。見えざる天の意志が働いていると思わざるを得なかつた。

●枕経に臨んだ折、死者が聖なる山の幾層にも渡る石段を登つては、右繞しながら、過去現在未来に渡る一生を内観するという不思議なビジョンに遭遇した。

実は、このボロブドールに関しては令和三年にある不思議な体験をしたことと重なるものでもあつた。(このときはボロブドールの遺跡については、恥ずかしいことに全く知らない。)

あるとき、枕経に臨んで、経文を唱えていると、不思議な光景をまのあたりにした。それは、亡くなった方が、山の石段を一步一步登り広場に出る。そこで、右回りに一巡し、更に石段を

登り広場に出る。そこでまた、右回りに一巡。不思議なのは、右旋する人物の右側、山の面に、その方の影のようにその方の前世から現世の生涯とおぼしき光景が歩みとともに映し出されることであつた。これは本人が内観していることなのであるうと思つた。やがて、ある時点まできて、歩みを止め、山側を向く。すると、山が開くかのようにして、奥にこの世と同じような世界があつて、その方はスーッとその中に入つていった。後ろからそつとついて行つて様子を見ていたので、その方が、どこに行くのか、慌てて覗こうとしたが、本人が望む世界らしい。余人には見ることは許されならしく、彼が入つてしまうと、すぐに閉じて、元の閑かな山に戻つていた。

ふと、この山は萬歳樂山かもしれないと思つたが定かではない。亡くなった人によって現れ方が異なるのだ。



しかし、彼らが内観するプロセスとその構造は一緒であるようだ。

というのも、枕経でこのような光景にあうことが、続けざまに三度も起きたのである。(小生の内面でおきたことではあるが……)

その後、梅尾祥雲の『般若理趣経の研究』に記載されているジャワのボロブドールと普賢金剛薩埵が関連しており、萬歳樂山も自然の山ではあるが、このボロブドール寺院遺跡と同様の見えざる寺院があつて、同じ、光り輝くもののヒビキを発しているのではないかと思卯に至った。それゆえ、かつて中国の四川省の大地震のあと、萬歳樂山登嶺の際、見えざる世界から『般若理趣経』を供養するしかないと強く導かれたのかも知れないと、だいぶ立ってからはあつたが合点がいく。

この経緯もあつて、ボロブドールに関する幾つかの論文を探し、検討した。

その中で、石井和子著「ボロブドールと『初会金剛頂経』」が、最も、小生の疑問に答えてくれるものであつた。

そこには、「ボロブドールの構造は釈尊の前世から現世へそして涅槃へのプロセスをあらわし、その覚りの内観のプロセスⅡ五相成身観の境界を示すものだ。」ということが記されていたのである。

そこで、小生は真言宗の加行や傳法灌頂どで伝授されていたものの次第から、愚かにも失念していた五相成身観をもう一度確認してみた。畏れながら、その、五相成身観はまさに如来との対峙させて頂いたときの小生のビジョンのプロセスでもあり、萬歳樂山頂でのプロセスでもあり、紅玻璃秘法秘授のプロセスでもあり、ハータックがエノクとメタトロンに導かれ光り輝くものをまのあたりにしたプロセスでもあり、おそらく上古人が感受したであ

ろう光り輝くカムアマナのプロセスでもあり、不可知の雲の奥に輝く光りあるものへのプロセスであり、わが恩師高橋が小生に言い残し、未完の遺作となった『地獄の消滅』や『新復活』の光り輝くもののプロセスでもあり、あの恩寵により示されたイザヤ書の偈頌とビルシヤナブツ光り輝くものへの祈りのことばであり、ブツダが親説として示されていた本初不生の光り輝くものの観法そのものであつた。それらに共通しているものは、マカバと五股金剛杵、大宇宙と個々のいのちの観想法であつた。



十六、「天王陛下がジャワのボロブドール寺院遺跡を訪ねられた」意義と初会金剛頂経と五相成身観について

天皇陛下は現地時間の二十二日午前八時すぎ、ジャワ島中部のジョグジャカルタ近郊にある「ボロブドール寺院」に到着されました。

ジャワ特産の染め物、「バティック」のシャツ姿で、床などを傷つけないため、サンダルを履かれています。

「ボロブドール寺院」は八世紀から九世紀にかけて建てられたとされる、世界最大級の石造りの仏教寺院で、天皇陛下は壁に釈迦の一生を表す彫刻が施された回廊をゆつくりと見て回られました。

また、仏像が納められている「ストーパー」と呼ばれる釣り鐘状の仏塔を写真に収め、最後には、寺院を背景に記念撮影をされていました。（NHKニュース）

それでは令和五年五月に天皇陛下がわざわざお立ち寄りになられたジャワのボロブドールの寺院遺跡とその意義について、僭越なことではあるが、発掘調査の研究を参考にして、小生が感受していることを記しておきたい。

①ボロブドールの寺院遺跡は『初会金剛頂経』の「別序」と「金剛界如来の会座」の記述に依拠し、『五相成身観』に基づいて構成されている。

これは「見えざる世界」の核心がこの「ボロブドールの寺院遺跡」込められていると受け止めている。

②ボロブドール寺院遺跡はその下部が方形の六段から、上部は円形の三段からなっており、中心塔までいれると全部で十段である。

③地下の隠れた基壇と下部の各段の回廊には「仏典の浮き彫り」がほどこされている。

④一四六〇面の浮き彫りや五〇四体

からなる「仏像」はインドのグプタ期の流れをひくものといわれる。

⑤地下の隠れた基壇には「分別善悪応報経」の教えのいくつかが浮き彫りとなっている。

⑥第一段の回廊は『方广大莊嚴』、本生譚、譬喩譚。

⑦第二段の回廊には本生譚、譬喩誕と『華嚴経』入法界品。

⑧第三段、第四段の回廊も入法界品が続く、「普賢行願讃」で終わっている。

⑨ボロブドール寺院の建築の意味するものについては種々の説がある。

⑩寺院全体がその「菩薩修行の十段階」を表している。

⑪『華嚴経』では、菩薩の修行が進むに従って心の向上する過程を十の段階に分けて説いているが、ボロブドール寺院が中心塔までいれると十段となるとところから、この寺院全体がその菩薩修行の十段階を表しているとみる

説。

⑫寺院全体が大乗仏教の欲界、色界、無色界の三界を具象化したものという説。

⑬欲界は地下の隠れた基壇に具象される欲望に満ちた世界であり、第一段から六段までは色界、即ち欲望は絶つたが肉体の存するものの世界、そして肉体も持たず精神的要素のみになる無色界は円壇の部分であるという説。

⑭ボロブドゥールには五百四体の仏縁が幾何学的に整然と配置されているところから立体曼荼羅であるという説。

基壇から第三段の主壁の仏龕には東西南北それぞれ印相の異なったもの、第四段には四方向同一のもの、計四百三十二体、さらに円壇の格子の透しの入った釣り鐘型のストウーパには七十二体の仏像が安置されている。

これら六種の仏像の印相は次の通りである。

東側―触地印 南側―与願印

西側―禪定印 北側―施無畏印

四方向―説法印 円壇―転法輪印

⑮拇尾祥雲はボロブドゥール全体を普賢金剛薩埵の立体曼荼羅とみなす。

拇尾は普賢金剛薩埵は最上根本仏、即ち本初仏であり、これは心的最高の原理であるとともに物的最高の本源であるとする。

⑯『初会金剛頂経』の金剛界曼荼羅の五仏の印相については、

不空の漢訳では、「此印名覺勝 能與佛菩提 不動佛觸地 宝生施願印無量壽勝定 不空施無畏」となっている。

これに基づけば方壇の四仏はそれぞれの印相から

東側―不動(阿闍)、南側―宝生、

西側―無量寿(阿弥陀)、北側―不空成就である。

ボロブドゥールの四仏は、初会金剛頂経の記述と一致する。

ただ、残りの一仏、毘盧遮那の印相は覺勝(智拳)印であり、これはボロブドゥールのものとは異なる。

(ちなみに、法圓寺の本尊は毘盧遮那の印相は覺勝(智拳)印である。これは金剛界曼荼羅に由来する。)

⑰ボロブドゥールの寺院遺跡を考察するにあたり注目されるのは『初会金剛頂経』の金剛界大曼荼羅広大儀軌品第一の「別序」と「金剛界如来の会座」の記述である。

「別序」は次のように述べている。

さて尊きマハーヴァイローチャナ(大毘盧遮那)は一切虚空界に常住している身・語・心金剛であり、一切如来と互に関連しあっており、金剛のように揺るぎないあらゆる領域を、完全に理解する智慧をそなえた存在であり、虚空界すべてにみちている微塵のごとき金剛のように、揺るぎない加護力によつて生じる智慧の母胎である。(中略)



空間のすべてに広がりゆきわたって、ウマー女神の夫シヴァ神、ヴィシュヌ神、三世間、三界、ブラフマー神、輪廻、仏陀、智慧、波羅蜜道、一切如来、毘盧遮那であり、尊きもの(大毘盧遮那)は、大菩提心であり、普賢であり、大菩提薩埵であり、一切如来たちの心に住していた。

「マハーヴァイローチャナ(大毘盧遮那)」の「ヴァイローチャナ」は「輝くもの」を意味し、漢訳では光明遍照、毘盧遮那(ビルシャナ)は音訳である。

『初会金剛頂経』において「大毘盧遮那」と表象されるものは、虚空界に遍満、あらゆる事象を包括する最高原理、普遍的真理であるとみている。

『初会金剛頂経』では「大毘盧遮那」は「一切如来たちの心に住していた」といっている。この一節を具象化したものがボロブドゥールの円壇上の七十二基のストゥーパと、その中に安

置されている転法輪の印相の如来像であると考えられる。

複数である一切如来を表す七十二基のストゥーパ中の如来が「一切如来となって顕現している大毘盧遮那」、即ち「密教」における人格化された普遍的真理・最高原理であることを示している。

漢訳では「大毘盧遮那」は「大毘盧遮那如来」と梵文にはない「如来」の語が加えられている。

「如来」とは仏のことであり、真如(＝普遍的真理)からきて、(真理の体現者として)衆生を教え導くものである。

「大毘盧遮那」は「普遍的真理を表象するもの」で「如来」や「仏」ではないとの理解がジャワにあったと考えている。

「大毘盧遮那」は「一切如来」という「仏」となってボロブドゥールの円壇に姿を顕わしているのである。

以上、いささか専門的で難解のまま紹介していて恐縮であるが、この法坐資料中、最も重要なところであるので、ここに資料として掲げさせて頂いた。

さて、かかる資料を得て、小生は、萬歳楽山から般若理趣経の読誦をうながされた経緯や、梅尾祥雲の『理趣経の研究』の中で触れられているボロブドールの寺院遺跡に関する研究によって、萬歳楽山が響かせているものはこのボロブドールの立体曼荼羅と同質のものであるという理解に到ったのである。

したがって、「萬歳楽山とボロブドール」は相似性の関係にあり、萬歳楽山にもたらされている見えざる寺院伽藍は「理趣経の根本義・普賢金剛薩埵の制底(cetiva)たる立體曼荼羅」展開する霊峰であると感受している。

## 十七、ボロブドール寺院遺跡と五相成

### 身観について

(註・ボロブドール寺院遺跡に関し、繰り返しの引用となるが、真言宗である法圓寺や歓喜寺、更には萬歳樂山の見えざる寺院・ボロブドールの寺院遺跡これらに通底する五相成身観は空海の阿字本不生すなわち即身成仏に至る壮大なものであり、今現在直面する人類意識の最大の変革と新生創造をうながす壮大な「光り輝くもの」の潮流であることを理解せんがためである。)

五相成身観についてもう少し見ていく。經典では、一切如来たちは、菩提坐に坐っていた釈尊を暗示している一切義成就菩薩のもとに赴く。

そして一切如来たちはこの菩薩にたいし、「あなたは一切如来の真実を熟知すること無く、あらゆる苦行に努めているが、どのようにして無上正等覺菩提を体得しようとしているのか」と問

う。

一切義成就菩薩は一切如来たちによってその心が啓発されアースパナカという三摩地から起きて、一切如来の真実を得る方法を尋ねる。

ここで一切如来により、

1)通達菩提心 2)修菩提心 3)成金剛

心 4)証金剛身 5)佛身円満の五段階

からなる五相成身観が説かれる。

第四段階で一切義成就菩薩は灌頂され、金剛界という灌頂名をもらい、金剛界如来となる。

続いて一切如来たちは須弥山頂の金剛摩尼宝峯楼閣へと向かう。

そこに移動し終わって、(一切如来た

ちは)金剛界如来を、一切如来たちとし

て加護をなし、一切如来の獅子座に、

あらゆる方向(四方)にお顔が向くように

坐らせた。

さて、その時、阿閼如来と、宝生如

来と世自在王(阿弥陀)如来と、不空成就

如来は、一切如来として、みずから自

身に加護をなし、世尊釈迦牟尼(金剛界)

如来は、あらゆる存在の等しさを正し

く理解していることによつて、(阿閼な

どの如来たちも)すべての方向は平等で

あると認識して、(金剛界毘盧遮那如来

の)四方に坐されたのである。

この部分から明らかなことは、一切如来たちが集まった須弥山頂の金剛摩尼宝峯楼閣で、金剛界如来は四方に顔を向けて、阿閼如来など4如来は四方それぞれの方向に坐ったことである。

これを具象化したのがボロブドゥールにおける方壇の如来坐像であると考える。

四如来は基壇と第一段から第三段まで、そして金剛界如来は第四段目に配置されている。

この全五段の意味するものは、上述の「五相成身観」即ち「悟りへの五段階」である。

隠れた基壇と方壇一段十四段の回廊には浮き彫りがほどこされている。これらの浮き彫りは、『分別善悪応報経』、仏伝記『方广大莊嚴経』、『譬論譚』、釈尊の前世物語「本生譚」、『華嚴経』「入法界品」そして「普賢行願讃」と六種の仏典をその素材としている。

これらは隠れた基壇の

『分別善悪応報経』に示される倫理以前の世界から、

「譬論譚」の倫理的世界、

「本生譚」「仏伝記」の初期仏教(小乗仏教)、

そして「入法界品」の大乗仏教への思想的展開をあらわすものでもある。

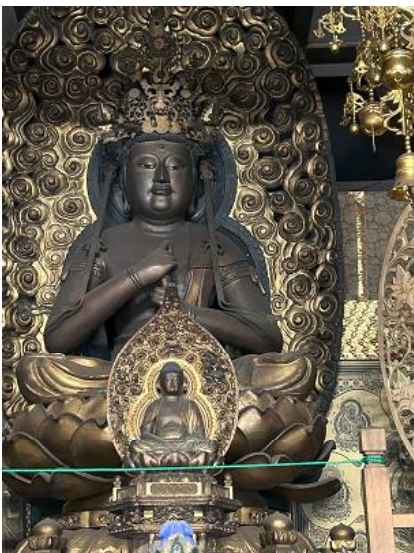
「入法界品」は善財童子(スダナ)が五十三人の善知識を訪れて教えを受け、最後に普賢菩薩にあって菩薩行がいかなるものかを知る求道の物語である。この道は無量劫の行であり、この世においては「成仏」は果たされない。

しかし、これを真言や瑜伽で越えた時、密教がめざす「即身成仏」は達成される。そして、この成就法が『初会金剛頂経』では上述の「五相成身観」なのである。

一方、この引用文から金剛界如来は釈迦牟尼如来とも呼ばれていることがわかる。

しかし、ここでは毘盧遮那如来の名はない。金剛界如来が毘盧遮那如来であることは次の十六大菩薩出生の段で知ることができる。

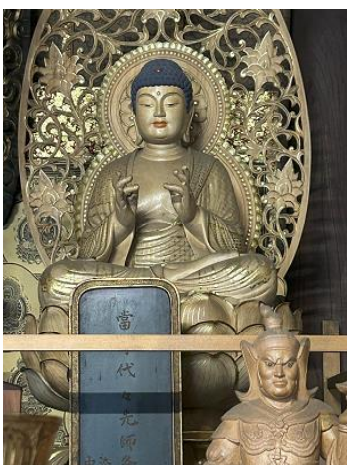
金剛界如来|| 釈迦牟尼如来|| 毘盧遮那如来なのである



『初会金剛頂経』では毘盧遮那の印相は智拳印であるが、この毘盧遮那にあたるポロブドゥールの第五仏(如来)の印相は説法印である。

釈尊は成道後、野苑において五人の比丘たちに最初の説法をした。初転法輪である。図像上ではこの時の釈尊は転法輪の印相をとるものがあるが、ポロブドゥールの仏伝図の浮き彫りでは転法輪ではなく、「説法印」である。

(註.. 不可思議に思うのは、小生がこのことを知らずに、華嚴宗僧からの「説法の印を結ぶ釈迦如来(木像)」を法圓寺に勧請していたことである。)





またボロブドゥールの仏伝図中、転法輪の釈尊は描かれていない。

ボロブドゥールでは、毘盧遮那Ⅱ釈迦牟尼、即ち釈尊であり、

また『初会金剛頂経』では、毘盧遮那、即ち釈迦牟尼は大毘盧遮那の顕現体である一切如来に教化される立場にあった。

言い換えれば「法」を説いたのは一切如来であったと理解していたので、  
転法輪の印相を用いず、説法印にした。

『初会金剛頂経』あるいは『初会金剛頂経』系の密教がジャワにもたらされていた。(中略)

わが国では『金剛頂経』と『大日経』は「両部不二」とするが各々の法身を「智法身」「理法身」と呼び区別する。

ジャワでは「真理・最高原理は一つ」ということで、その仏格化である

「仏陀尊」で統合したと考える。

ジャワに伝わる経典において「ディフルーパ(光り輝くもの)」と表象されるものは普遍的真理・最高原理である。

この普遍的其理・最高原理が仏教で人格化されたもの、即ち仏格化されたものが「パターラ・ピアン・ブツダ(仏陀尊)」である。

これは『初会金剛頂経』中の「一切如来」となって顕現している「マハーヴァイローチャナ(大毘盧遮那)」にあたる。

ジャワに伝わる密教経典は、仏教にいう普遍的真理「法」とその人格化である「法身」、即ち「光り輝くもの」と「仏陀尊」との関係を「光り輝くものは仏陀尊である」「光り輝くものは仏陀尊の本体となっている」と説いている。

この「光り輝くもの」と表象される普遍的真理・最高原理は、我々の認識の及ぼないものであるが瑜伽や三摩地

により個体に顕わになる。

「光り輝くもの」の顕現・浸透が普遍的真理・最高原理との合一であり、これが仏教でいう「目覚め」であり「成仏」である。

(龍雲は、瑜伽・三摩地、顕現・浸透を「互換重合渉入」とする)

ジャワに伝わる密教経典の「五如来尊」は『初会金剛頂経』の五如来、毘盧遮那・阿閼・宝生・世自在王(Ⅱ阿弥陀)・不空成就と一致する。

『初会金剛頂経』の「別序」の「大毘盧遮那」は虚空界に遍満し、あらゆる事象を包括する「最高原理」の表象である。

古ジャワにおいてこの「最高原理」、即ち「真理」の当体「大毘盧遮那」を「光り輝くもの」、「一切如来の心に住した大毘盧遮那」、即ち「一切如来となつて姿を顕している大毘盧遮那」、仏格化された「最高原理」を「仏陀」、報身

毘盧遮那を「ワイローチャナ」とそれぞれ別の用語を使用したのは適切であった。

わが国では「大毘盧遮那」も、曼荼羅図像の五仏の中尊である報身毘盧遮那もどちらも同じ「大日如来」として



ボロボドゥールの仏像構成は『初会金剛頂経』の「別序」と「金剛界如来の会座」の具象化であるといえる。

これは理趣経の根本義によりて造立せられたる普賢金剛薩埵の立體曼荼羅で、圓層における七十三の胎藏塔を以ては色心不二の性海を表し、方壇五層の龕室には普賢の性海より示現する毘盧遮那、阿閼、寶生、彌陀、不空成就の五佛を安置し、壁面には佛傳並びに善財童子の推求の旅の場面などが無数に浮彫りせられている。

普賢金剛薩埵の立体曼荼羅は大宇宙における潜象と現象即ちダークエネルギーとダークマターと現象界が刻々に互換重合している正反マカバが創発する金胎兩部不二の曼荼羅である。萬歳樂山はこの普賢金剛薩埵の立體曼荼羅であるが故に靈峰である。

佛傳並びに善財童子の推求の旅の場はひとりひとりの生涯における内観（自己省察）場を象徴している。萬歳樂山は内観による意識の变革を人類に促しているのである。

#### 十八、萬歳樂山の見えざる立体曼荼羅

萬歳樂山の見えざる立体曼荼羅を梶尾祥雲の説からまとめると次のようになると思われる。

一、この宇宙の根源にして、個々の生命の基本たる、無始無終の普門本體の普賢金剛薩埵をば、普賢金剛とも、普賢法身とも云ふ。

二、第六會の金剛頂經たる廣本の般若理趣經などでは、これを最上根本佛と云ひ、文殊説名義經などでは本初佛と称している。

三、この本初佛たる普賢金剛薩埵の性海より、大日マハーヴァイローチャナ、阿閼、寶生、彌陀、不空成就の五佛を始め、種々様々の色身を示現し、種々様々の説法をなし、種々様々の智慧を啓示する妙用なる立體曼荼羅である。

四、靈峰萬歳樂山はこのこの本初佛と

互換・重合している。

五、この大乘仏教徒によって築かれた普賢金剛薩埵の立體曼荼羅が具体的に

建立されたものとして、佛跡ボロブド

ールの制底（チャイティヤ）・塔婆（スツウパ）・曼荼羅（マンドラ）がある。

六、靈峰萬歲樂山は、普賢金剛薩埵の立體曼荼羅が、刻々なる本不生の神泉

より湧き出づる神のいのちの刻々の創造性によって、次元を超えて響かせて

いる立體曼荼羅であり、精霊が宿る靈峰制底(ceitya)である。

萬歲樂山は大宇宙大自然界・地球自身を掌る曼荼羅山であるが、さらに背後には須弥山が響いている。

七、佛跡ボロブドールには、大日如来

・金剛薩埵・龍樹菩薩・龍智菩薩・金剛智三蔵・不空三蔵の付法の系譜が活きている。それは、佛跡ボロブドール

が建立された時期のジャワにおいて、真言付法の祖である金剛智三蔵と不空

三蔵が邂逅し、真言相承がなされたからである。この奇縁が、いま、ここに、あらためて開かれているのである。

八、大乘仏教徒によって築かれた普賢

金剛薩埵の立體曼荼羅は、深遠な大宇宙の根源にして、個々の生命の基本たる、無始無終の普門本體の普賢金剛薩埵を示す曼荼羅である。

九、この曼荼羅を通し、その奥に教示されているものを感じ、意識の変革を起こし、活かしていく。

この曼荼羅界に入る者は、誰でもが、その眞實義の刻々なる本不生の神泉より湧き出づる神のいのちの刻々の創造を享受し、如来の導きを感じてできる。

この理趣經の根本義における普賢金剛薩埵の立體曼荼羅が、天地所生の萬歲樂山を通じ顕現されていると考える。

十、佛跡ボロブドールが永いこと密林に埋もれ、異宗教による破壊を免れえ

た奇蹟は、むしろ、その眞實義の刻々なる本不生の神泉より湧き出づる神のいのちの刻々の創造なるが故の奇蹟であらう。

そして、いま、此处に、まさに、本初佛 (Adi-buddha) として、須弥山と佛跡ボロブドールと萬歲樂山において互換重合する相似象の共振が起きている。

十一、ここに、靈峰萬歲樂山大曼荼羅開頭に導かれたのである。

以上、萬歲樂山が、この現象界の地球上に出現する潜象界の阿字本不生曼荼羅であり、須弥山と互換重合する相似象の靈峰であることを『ブツダ親説』と『般若理趣經』の本初不生によつて教示された。

十九、萬歲樂山頂禪の根本所依の禪定

法は「五相成身觀」にある

**五相成身觀は**



こんごうかいだいまだらこうだいきぎほん  
**金剛界大曼荼羅広大儀軌品**  
しょうしゅうぶん

**正宗分**

しょけぎょうさんまじ  
「二」初加行の三摩地にある。

### 【五相成身觀の概略】

しゃくそん  
釈尊に比定される一切義成就と  
いう名の菩薩が菩提道場で阿婆頗  
なかふどうさんまじ  
那伽(不動)三摩地に入っていたところ  
に、どこからともなく一切如来が姿  
を現して菩薩を警覺し、難行を重ね  
る菩薩に対して、速やかに一切如来  
の眞実を獲得する修行方法として、眞  
言とともに月輪と金剛杵を用いた五  
段階からなる觀想法を教示するのであ  
る。その結果、菩薩は一切如来に加  
持されて、自らに備わる如来性に目  
覚め、一切如来と平等性となつ  
て金剛界如来として成道する。  
こんごうかいによらい  
金剛界如来とは序分の毘盧遮那  
によらい  
如来のことであり釈迦如来にあたる。  
そして金剛界如来は一切如来に

しゅみせんちやう  
よつて須弥山頂の金剛摩尼宝峯  
ろうかく  
樓閣にある獅子座に加持されて住し、  
いっさいによらい  
一切如来はその周囲に阿闍等の四  
ぶつ  
仏となつて金剛界如来の会座を形  
成する。

### 【五相成身觀の内容】

以下、五相成身觀の内容について経  
典から「漢文訓読」と「漢文和訳」と  
「サンスクリット文和訳」で示す。

いっさいによらい  
一切如来の住处

### 訓読

時に一切如来、此の仏世界に満ちた  
もうこと猶し胡麻の如し。

### 和文

その時、一切如来たちによつて、こ  
の仏国土はあたかも胡麻(の莢)  
のように満たされていました。

### サンスクリット文和訳

せんぶしゅう  
瞻部洲への移動

かくて一切の如来たち(は毘盧遮那を

囲んで瞻部洲へと移動し、それら如来  
たちの身によつてこの仏刹はあたか  
も胡麻莢の如くに遍く満たされたの  
であつた。

いっさいによらい  
一切如来の警覺

### 訓読

爾の時に一切如来、雲集して、  
いっさいぎじやうじゆほさつまかさつ  
一切義成就菩薩摩訶薩の菩提  
じやう  
場に坐したもうに於て往詣して、  
じゆようしん  
受用身を示現し、咸く是の言を作  
したもう。

ぜんなんし  
善男子よ、云何が無上正等  
がくぼだい  
覺菩提を証せんや、一切如来の  
眞実を知らずして諸の苦行を忍んで、  
と。

いっさいぎじやうじゆほさつまかさつ  
時に一切義成就菩薩摩訶薩、  
いっさいによらい  
一切如来の警覺に由りて、即ち阿  
さはなかさんまじ  
婆頗那伽三摩地より起ち、一切如来  
を礼して白して言さく、

世尊如来よ、我に教示したまえ、云

何が修行せんや、云何が是れ真実なるや、と。

## 和文

その時、一切如来<sup>いっさいによらい</sup>たちは、大きな集まりとなつて、菩提道場に坐つて一切義成就<sup>いっさいぎじょうじゅ</sup>という菩薩摩訶薩<sup>ぼさつまかさつ</sup>のところ<sup>ところ</sup>に近づきました。

(近づいてから)菩薩<sup>ぼさつ</sup>に対し受用身を現して、

次のように言われました。

「よい生まれの若者よ。 どのようにして最高の正しい悟りを得るつもりなのか？」

あなたは一切如来<sup>いっさいによらい</sup>の真実を知らないで、あらゆる苦行に耐えているが」と。

すると、一切義成就菩薩摩訶薩<sup>いっさいぎじょうじゅぼさつまかさつ</sup>は、一切如来<sup>いっさいによらい</sup>たちによって促されて、

アースパーナカという心の集中からもとにもどり、

一切如来<sup>いっさいによらい</sup>たちに礼拝してから、次のように申し上げました。

「尊き如来たちよ、どうか小生にお教えください。どのように修行すればよいのでしょうか？ またその真実とは、どのようなのでしょいか？」と。

## サンスクリット文和訳

一切の如来たちによる驚覚

そこで一切の如来たちは大集会に入り、一切義成就菩薩が菩提道場に坐しているそのところに近づいた。近づいて菩薩に(おのがじしその)受用身を示現して、次の如くに言った、

「善男子よ、汝が(そのように)あらゆる難行に耐えたからとて、どうして汝は無上なる正等覚を現等覚する(ことができる)であろうか、汝は一切如来<sup>いっさいによらい</sup>の真実を知つてはいないのであるから・  
・・・」

(二)五相の一 通達本心(通達菩提心)  
提心

## 訓誥

是<sup>かく</sup>の如く説き已<sup>おわ</sup>るや、異口同音に彼の菩薩に告げて言わく。

善男子よ、当に自心を觀察する三摩地<sup>まじ</sup>に住して、自性成就<sup>じしょうじょうじゅ</sup>の真言を以つて自ら恣<sup>ほしいまま</sup>に誦<sup>じゆ</sup>ずべし、と。

唵<sup>おん</sup>質<sup>しつ</sup>多鉢<sup>たは</sup>囉底<sup>らちべい</sup>微騰<sup>いどうき</sup>迦嚕<sup>やろみ</sup>弭<sup>み</sup>

時に菩薩、一切如来に白して言さく。

世尊如来よ、我遍<sup>われあまね</sup>く知り已<sup>おわ</sup>んぬ、我<sup>われ</sup>自心を見るに形月輪<sup>がちりん</sup>の如し、と。

## 和文

このように(一切義成就菩薩が)語り終わると、一切如来<sup>いっさいによらい</sup>たちは、声をそろえて、その菩薩に告げられました。

「よい生まれの若者よ、自らの心をよく觀察するために心を集させ、自性<sup>しょうじょう</sup>として成就<sup>じょうじゅ</sup>している真言<sup>しんごん</sup>を欲するだけ唱えながら、修練しなさい」

と。

「オーム。小生は心に通達つうだつします」

その時、その菩薩は、一切如来いつさいにょらいたちに、次のように申し上げました。

「尊き如来たちよ、小生は理解しました。自分の心(むね)のあたりに月輪がちりんのような形が見えます」と。

### サンスクリット文和訳

#### 【第一・通達菩提心】

そこで一切の如来たちに驚覚されて、一切義成就菩薩は(はっとして)我にかえり、その無動三昧より起って一切の如来たちに頂礼し、(彼らに)呼びかけて次の如くに問い申し上げた、

「世に尊き諸の如来たちよ、教示たまえ、小生はどのようにすれば、(また)どのような(真理命題としてのその)真実に通達することができるのであります

ようか」と。

その様に言われて一切の如来たちは、かの菩薩に口を揃えて次のように仰せられた、

「通達せよ、善男子よ、へ自己の心を各に観察する三昧」によって、(すなわち、その命題の内容とそれを誦することとの同一性がその本性よりして成就しているところの(したがつて、誦しさえすればそのことが成就する筈の、次の如き)真言を好きな(回数)だけ誦することによって・・・。

オーム・チッタプラティヴェーダム・カローミ。

(オーム、われは「自」心「の源底」に通達せん。)

#### (二) 五相の二 修菩提心

一切如来、咸く告げて言わく。

善男子よ、心は自性光明なり。猶なおし遍く功用を修するに、作すに随したがつて、随うつて獲るが如し。亦、素衣そえの色を染むるに、染むるに随したがつて、随うつて成ずるが如し、と。

時に一切如来、自性光明の心智しんちをして豊盛ぶじょうならしめんが為の故に、復、

彼の菩薩に勅して言わく、

俺菩提質多敵怛波娜夜弭

すまひイミヤマヤミ

此の性成就の真言を以て菩提心を発さしむ。

時に彼の菩薩、復、一切如来より旨を承けて、菩提心を発し已こつて是の言ごんを作なさく、

彼の月輪の形の如く、我われも亦、月輪の形の如く見る、と。

### 和文

一切如来たちは、お答えになり

「よい生まれの若者よ、この心はもともと光り輝くものなのだ。



## サンスクリット文和訳

それはちょうど色を塗られれば塗られたように(純化されれば純化されたように)なるのだ。あたかも白い布を赤で

染めると、赤になるのと同じようなものである」と。

そして一切如来<sup>いつさいによらい</sup>たちは、心は本来光り輝くものであるという智慧を大きくするために、再び、その菩薩に命じられた。

すなわち、  
「オーン 小生は菩提心を発します」という

この自性として成就している真言によって菩提心を発させたのです。

そしてその菩薩は、再び一切如来<sup>いつさいによらい</sup>の命令を承けて、菩提心を発してから、次のように申し上げました。

「先ほど月輪のような形であつたものが、月輪であるとはつきり見えます」と。

## 【第二・修菩提心】

そこで一切義成就菩薩は一切の如来たち<sup>おしえ</sup>に次の如くに申し上げた、

「小生は教示<sup>おしえ</sup>られ、その通りにいたしました、世に尊き諸の如来たちよ。

(その結果)小生には(小生)自身の心<sup>フリダヤ</sup>蔵<sup>がちりん</sup> (の上に)月輪<sup>すがた</sup>の行相が見えてまいりました」と。

一切の如来たちは仰せられた、

「善男子<sup>ぜんなんし</sup>よ、汝の心<sup>フリダヤ</sup>蔵<sup>おしえ</sup>の上の月輪として表象されたところの汝の(この心

は本性<sup>ほんしょう</sup>清<sup>しょう</sup>浄<sup>じょう</sup>である。それは丁度(汚れている布が)浄治され(て本来の

清浄さをとり戻し)た如くに、その如くに清浄なものとして本来より)あるので

ある。(逆に言えば、汝のその心が現に煩惱<sup>ぼんのう</sup>によって染汗<sup>ぜんま</sup>せられているに

しても、それが本来清浄なることは、本来)白い衣を染料で染めた(場合の)如

くなのである」と。

そして一切の如来たちは、(この、自

心が本性清浄であるという認識を増大せしめんがため、重ねてかの(一切義成就)菩薩に対して、

オーム・ボーディチッタム・ウトパ

ーダヤーミ。

(オーム、われは菩提心を発さん。)

という、この(命題の内容とそれを誦することの同一性<sup>どういつせい</sup>がその本性よりして成就している真言)を教示<sup>きようじ</sup>し、

それによって(菩薩に清浄の)菩提心を生起せしめた。

そこで(一切義成就)菩薩は重ねて一切の如来たちの教勅<sup>おしえ</sup>に従つてこの(発

菩提心<sup>ぼだいしん</sup>真言)を誦し、それによって菩提心を生起せしめて、その結果を次の如くに申し上げた、

「小生の心<sup>フリダヤ</sup>蔵<sup>おしえ</sup>の上に顕現した)その月輪<sup>すがた</sup>の行相をしたものが小生には(いまや

真の)月輪そのものとして見えてまいりました。」

### (三) 五相の三 修金剛心 しゅこんごうしん

#### 訓読

一切如来、告げて言わく、  
いっさいによらい

汝已に一切如来の普賢の心を発して、  
いっさいによらい ふげん  
金剛の堅固なるに齐等なることを  
さいどう  
獲得したり。善く此の一切如来の  
ぎやくとく  
普賢の発心に住して、自らの心の月輪  
ほっしん  
に於て金剛の形を思惟するに、此の真  
言を以つてすべし、と。

おんちしゅたばざら  
**唵底瑟縛日囉**

うぢもろふ

菩薩、白して言さく、  
世尊如来よ、我月輪の中の金剛を見  
る、と。

#### 和文

一切如来たちは、言われました。  
いっさいによらい

「あなたは、もうすでに一切如来  
いっさいによらい  
の心髄であり）普賢なる心を  
発し、それによつて金剛のように堅固  
な心を得たのだ。」

（それを十分に自分のものとしなさい。）

一切如来の普賢なる心を  
いっさいによらい

発こして（その心の状態をより確かなも  
のにするために、次の真

言を用いて、自身の心（むね）の月輪の中  
に金剛杵の形を思念しな  
こんごうしよ  
さい」と。

「オーン 立て、金剛杵よ」  
こんごうしよ

菩薩は申し上げました。

「尊き如来たちよ、月輪の中に金剛  
しよ  
杵が見えます」と。

#### サンスクリット文和訳

##### 【第三・修金剛心】

一切の如来たちは仰せられた、

「（それは）汝（に内在するところ）の一  
いっ  
切如来の核心」である。（汝は今や）

普賢菩薩の大菩提心を発したのであ  
だいぼだいしん

り、（そのことによつてわれわれによつ

て）敬礼さるべきものとなっている。そ  
だいぎだいしん

の大菩提心はよく完成されねばなら  
だいぎだいしん

ない。（そこでまずその）一切如来普  
いっさいによらい

賢心を発すことを堅固になさんがため

に、汝はこの真言を誦することによつ  
フリイダヤ

て自らの心 歳の月輪中に金剛杵の影  
像を思念せよ。

**オーム・ティシユタ・ヴァジュラ。**

**（オーム、立て、金剛杵よ。）**

（一切義成就菩薩は申し上げた、

「世に尊き諸の如来たちよ、小生は  
月輪中に金剛杵を見ます」と。

### (四) 五相の四 修金剛身

#### 訓読

一切如来、成く告げて言わく。  
いっさいによらい

一切如来の普賢の心の金剛を堅固な  
らしむるに、此の真言を以つてすべし、  
と。

おんばざらたまかん  
**唵縛日囉怛麼句哈**

うばざらふあ

所有、一切虚空界に遍満せる一切如  
いっさいによらい  
来の身口心の金剛界は、一切如来の  
加持を以つて、悉く薩埵金剛に入る。  
さつたこんごう

則ち一切如来は、一切義成就  
菩薩摩訶薩に於て、金剛名を以つ  
て、金剛界、金剛界、と号して灌  
頂したもう。  
時に金剛界菩薩摩訶薩、彼の一切如来に白して言さく、  
世尊如来よ、我一切如来は自身為りと見る、と。

### 和文

一切如来たちは、言われました。  
「この一切如来の普賢なる心の金剛杵を、次の真言を用いて、より堅固なものに下さい」と。  
「オーン 小生は金剛杵を本性とするものである」

すると、すべての虚空界に遍満するほどの、一切如来の身体と言葉と心の金剛界のすべてが、一切如来たちの加持力によって、その一切義成就菩薩の（月輪中の金剛杵の中に流入しました。

「そして一切如来たちは、尊き一切義成就（大）菩薩を、  
「金剛界、金剛界」と、金剛の名前の灌頂によって灌頂し（祝福）しました。  
その時、金剛界大菩薩は、一切如来たちに、次のように申し上げました。  
「尊き如来たちよ。小生は自らが一切如来の（身体と言葉と心の金剛界のすべてを凝集した）身体であることを知りました」と。

### サンスクリット文和訳

#### 【第四・証金剛身並に名灌頂】

一切の如来たちは仰せられた。  
「汝はこの真言（を誦すること）によって一切如来普賢心たるその金剛杵を堅固になせ、  
オーム・ヴァジュラアートマコー・  
アハム。  
（オーム、われは本性においてこの金剛〔杵〕に他ならず。）」

（一切義成就菩薩は言われた如くにこの真言を誦した。）すると、一切虚空界に遍満するほど（に多くの）それら一切如来身語心金剛界のすべては、一切の如来たちの加持によってその薩埵金剛杵の中に入った。そこで、一切の如来たちによって、彼、世に尊き一切義成就菩薩は、

「（汝は）金剛界なり、金剛界なり。」

と、金剛名灌頂によって灌頂された。

そこで（今や）金剛界（という灌頂名を得た一切義成就）大菩薩は、それら一切の如来たちに次の如くに申し上げた、  
「世に尊き諸の如来たちよ、小生には小生自身が一切の如来たちの総体を自らの身体（とする者）であるように見うけられます。」

#### （五）五相の五

仏身円満

### 訓読

一切如来、復、告げて言わく、



是の故に、摩訶薩よ、一切の薩埵金剛は一切の形を具することを成就せり。自身の仏形を觀するに、此の自性成就の真言を以つて、意に随つて誦ずべし、と。

おんやたらばたたぎやたさたたか  
**唵也他薩婆怛他讓多薩怛他哈**

उमिपिमेवैवैपिपिपिपि

是の言を作し已るや、金剛界菩薩摩訶薩、自身の如來たることを現証し、尽く一切如來を礼し已つて白して言さく、

唯し願わくは、世尊諸の如來よ、我を加持して、此の現証菩提をして堅固ならしめたまえ、と。

是の語を作し已るや、一切如來は金剛界如來の彼の薩埵金剛の中に入りたもう。

**和文**

一切如來たちは再び言われました。

「ならば、偉大な薩埵よ、(その)月輪

中の金剛杵の全体が、一切の立派な身体的特徴をそなえた仏陀の姿となるように、自ら(そのような)仏陀の姿として觀相しなさい。(同時に)次の自性として成就している真言を用い、それを欲するだけ低誦しなさい」と。

「オーン 一切如來たちがあるように、そのように小生はあります」

このように告げられた時、金剛界(大)菩薩は、

自身が如來であることを明らかに悟り、一切如來たちを礼拝してから、次のように語りました。

「尊き如來たちよ。小生を加持してください。そしてこの悟りを堅固なものにしてください」と。

このように言われた時、一切如來たちは、金剛界如來の月輪中の金剛杵の中に入られたのです。

**サンスクリット文和訳**

【第五・仏身円満】

一切の如來たちは仰せられた、

「大薩埵よ、その觀を更に進め、次の如き自性成就の真言を好きな(回数)だけ誦して、(それ)によつて、あらゆる最勝の行相を具備し、仏の影像ある(その)薩埵金剛(杵)を(汝自身であると觀想せよ、  
オーム・ヤター・サルヴァタターガ  
タース・タター・アハム。

(オーム、一切の如來たちがあるが如くに、その如くにわれはあり。)」

一切の如來たちによる加持

かくの如くに言われて金剛界大菩薩は直ちにこれこそがかの一切如來の真実、すなわち即身に成仏を齎(もたら)す究極の真理の命題に他ならざるところのこのへ仏身円満の真言を誦したのであるが、それによつてその場で自らが(今や)如來であると知つて現等覺した。現等覺して彼ら一切の如來たちに頂礼し、次の如くに申し上げた。

「小生を加持したまえ、世に尊き諸の如来たちよ。そして(小生の)この現等覺を堅固ならしめたまえ。」

そのように言われて、一切の如来たち

ちは金剛界如来のその薩埵金剛に入つた。

## 金剛界如来の成道

### 訓読

時に世尊金剛界如来、当に彼の刹那の頃に、一切如来の平等智を現証等覺し、一切如来の平等智の三昧耶に入り、一切如来の法の平等智の自性清淨なることを証して、則ち一切如来の平等の自性光明の智蔵、如来応供正遍知と成りたもう。

### 和文

すると、尊き金剛界如来は、まさにその瞬間に、一切如来の平等性の智慧を明らかに悟り、

① 一切如来の平等性の智慧を明らかに悟り、

② 一切如来の(金剛のような)平等性の智慧(を象徴する)印の秘密の三昧耶に入り、

③ 一切如来の教えのような平等性の智慧に通達して本性の清淨なることをさと(り)、

④ 一切如来のすべての平等性をさ(る)ことによって本来光り輝く智慧の源となり、如来・阿羅漢・正等覺となつたのです。

### サンスクリット文和訳

金剛界如来の成道

すると世に尊き金剛界如来はその刹那直ちに、

一切の如来たちと(自ら)の平等性を認識したその智慧によって現等覺せるもの、

一切の如来たちと(自らとがその)金剛(の智慧)において平等なることを認識し

たその智慧によって印契の秘密の三昧耶に証入せるもの、

一切の如来たちと(自らとがその)法において平等なることを認識するその智慧に通達することによって自性において清淨ならしめられるもの、

一切の如来たちと(自らとが)あらゆる点で完全に平等なることを認識したことによって本性清淨なる智慧の源となつたるもの

如来・阿羅漢・正等覺者となつたのである。

### 訓読

金剛界如来の神變加持

時に一切如来、復一切如来の薩埵金剛より出でて、虚空蔵大摩尼宝を以て灌頂し、観自在の法の智を発生して、一切如来の毘首羯磨に安立し、此れに由つて須弥慮頂の金剛摩尼宝峯楼閣に往詣したも

う。至り已って、金剛界如来は一切いっさいによらい如来の加持を以って、一切如来のししぎ師子座に於て一切の面に安立あんりゆうしたもう。

### 和文

その時、一切如来たちは、再び一切如来いっさいによらい（金剛界如来）の月輪中の金剛杵から現れ出て、（金剛界如来を）虚空蔵大摩尼宝の灌頂かんじようによって（三界法王の位に）灌頂し、観自在の法の智慧を生起させ、一切如来のすべての行為を実現する位に安立あんりゆうしてのち、スメール（須弥）山の頂上にある金剛摩尼宝頂の楼閣ろうかくに向かわれました。そこに到達すると、（一切如来たちは）金剛界如来を一切如来たるものとして加持してから、一切如来の説法の座としてふさわしい師子座に、すべての方角に顔が向くように坐らせたのです。

### サンスクリット文和訳

須弥山頂金剛摩尼宝頂楼閣しゅみせんちようこんぎょうまにほうちようろうかくへの移動・金剛界如来は一切如来の位に就く

そこで一切の如来たちは再びかの一切如来薩埵金剛より出でて虚空蔵大

摩尼宝灌頂によつて（金剛界如来に）灌頂

し、（ついで）観自在菩薩の法の智慧を

生起せしめ、（さらに彼を自分たち一切

の如来を代表する）へ一切如来へと

して一切業者（すなわち宇宙建造者）たる

地位に据え、その上で彼を伴つて須弥

山の頂上なる金剛摩尼宝頂楼閣に移動

した。（そしてそこに）移ると、金剛界如

来を加持して一切如来たるの資格

を授け、一切如来の師子座に一切方

に向いて坐らせたのであった。

金剛界如来の会座

### 訓読

時に不動如来と宝生如来と観自在王如来と不空成就如来と一切如来は、一切如来を以つ

て自身を加持し、婆伽梵釈迦牟尼如来は一切平等に善く通達したもうが故に、一切方の平等なることを観察して四方に而も坐したもう。

### 和文

そしてまた一切如来たちは阿閼如来と宝生如来と観自在王如来と不空成就如来の四如来となり、それぞれが一切如来たるものとして自らを加持してから、尊き（金剛界如来すなわち）釈迦牟尼如来はすべてのものが平等であることをよく理解しているの、かれら四如来も一切の方角の平等なることを認識して、その金剛界如来の四方に坐られたのでした。

### サンスクリット文和訳

四方の一切如来

そこで阿閼如来と宝生如来と世自在王如来と不空成就如来は、へ一切如来たるの資格を自分自身に対しても加持して、世尊釈迦牟尼如来が一切平



等性によく通達していることからして  
一切の方角は平等であるとの認識に従  
って、(世尊の)四方に(それぞれに)坐し  
たのである。

## 二十、弘法大師空海『即身成仏義』

弘法大師空海の『即身成仏義』漢文  
を訓読したものを掲げる。

萬歳樂山の「見えざるものの核心」  
に据えられるものと判断するからであ  
る。

なお、この即身成仏義に関する理解  
の法坐資料は紙面の都合上、別の機会  
に譲る。

### 【即身成仏義】

(一) 二経 一論八箇の證文。

問うていわく、諸経論の中にみな

三劫成仏と説く。いま、即身

成仏の義を建立する何の憑拠かあ

るや。

答う、秘密藏の中に如来かくのご

とく説きたもう。かの経説いかん。

(1) 『金剛頂経』に説かく、

「この三昧を修するものは現に仏菩

提を證す」と。(この三昧とは、いわく  
大日尊一字頂輪王の三摩地な

り。)

(2) またいわく、「もし衆生あつ

てこの教に遇うて昼夜四時に精進して

修すれば、現世に歡喜地を證得し、

後の十六生に正覺を成ず」と。

いわく、この教とは、法仏自内

証の三摩地大教王を指す。歡喜

地とは、顯教にいうところの初地に

はあらず、これすなわち自家仏乗の

初地なり。つぶさに説くこと、地位品

の中のごとし。十六生とは、十六大菩

薩生を指す、つぶさには地位品に説く

がごとし。

(3) またいわく、「もしよくこの

勝義によつて修すれば、現世に無

上覺を成ずることをう」と。

(4) またいわく、「まさに知るべ

し、自身すなわち金剛界となる。自

身金剛となりぬれば堅実にして傾壞

なし、われ金剛身となる」と。

(5) 『大日経』にいわく、「この

身を捨てずして神境通を逮得し、

大空位に遊歩して、しかも身秘密を

成ず」と。

(6) またいわく、「この生において

悉地に入らんとおもはば、その所応に

したがってこれを思念せよ。まのあた

り尊の所において明法を受け觀

察し相応すれば成就を作す」と。

この経に説くところの悉地とは、持

明悉地および法仏の悉地を明す。大

空位とは、法身は大虚に同じて無礙な

り。衆象を含じて常恒なり。故に大空

という。諸法の依住するところなるが

故に位と号す。身秘密とは、法仏の三

密は等覺も見難く、十地も何ぞ窺わん。

故に身秘密と名づく。

(7) また竜りゅうみょう 猛ばう 菩薩ぼだいしんろんの『菩提心論』に説かく、「真言しんごん法の中に

み即身成仏するが故に、これ三摩地の法を説く。諸教の中において闕けつして書せず」と。是説三摩地とは、法身自證の三摩地なり。諸教とは他受用たじゅうよう身所説の顕教なり證す」と。

(8) またいわく、「もし人ひと 仏ぶつ 慧えを求めて、菩提心ぼだいしんに通達つうだつすれば、父母ふぼ所生の身に、速に大覺だいかくの位を證す。

## (二) 即身成仏の頌

かくのごとき等の教理證文によつてこの義を成立す。かくのごときの經論じぎしやべつの字義差別いかん。

頌にいわく、

六大無礙むげにして常に瑜伽ゆがなり、【体たい】

四種ししゅ 曼荼まんだ各々離れず、【相そう】

三密加持さんみつかしすれば速疾そくしつに顕わる、

## 【用ゆう】

重々じゅうじゅうたいもう 帝網なるを即身と名づく。

## 【無礙むげ】

法然ほうねんに薩般若さはんにやを具足ぐそくして、心数心王しんずしんのうせつじん刹塵ごちむさいちに過ぎたり、各々五智無際智を具す、円鏡えんきやうりき力の故に実覺智じつかくちなり。

## 【成仏じょうぶつ】

釈していわく、この二類八句もつて即身成仏の四字を歎ず。すなわちこの四字に無辺の義を含せり。一切の仏法はこの一句を出でず。故に略して兩頌を樹たてて無辺の徳を顕わす。頌の文を二に分つ。初の一類は即身の二字を歎じ、次の一頌は成仏の兩字を歎ず。

初の中にまた四あり。初の一句は体、二には相、三には用、四には無礙なり。

後の頌の中に四あり。初には法仏の成仏を挙げ、次には無数を表し、三に

は輪円を顕わし、後には所由いだいを出す。

## (三) 六大無礙常瑜伽

いわく、六大とは五大とおよび識となり。『大日經』にいうところの「我れ本不生もとさへを覺り、語言の道を出過し、諸過解脱することを得、因縁を遠離せり、空くうは虚空に等しと知る」と。これその義なり。

かの種子真言しゅじしんごんにいわく、「アビラウンケンウン乾栽差轄禽」。いわく、阿字諸法本不生の義とはすなわちこれ地大なり。嚩字離言説とはこれを水大という。清淨無垢塵とはこれすなわち火大なり。因業不可得と

は訶字門風大なり。等虚空とは。欠字の字相すなわち空大なり。我覺とは識大なり、因位には識と名づけ、果位には智という。智すなわち覺なるが故に。梵音のボダ嚩嚩とボウジ始翳は一字の転なり。ボダ嚩嚩をば覺と名づけ、ボウジ始翳をば智という。故に諸經の中

にいうところのものとは、古には遍知と翻じ、新には等覺と訳す。覺知義相渉るが故に。この經に識を号して覺とすることは、強きに從いて名を得。因果の別、本末の異のみ。この經の偈は五仏の三摩地に約してかくのごとくの説をなす。

また『金剛頂經』にいわく、「諸法本より不生なり、自性言説を離れたり、清淨にして垢染なし。因業なり、虚空に等し」と。もろもろ

これまた『大日經』に同じ。諸法とは、いわく諸の心法なり。心王心数その数無量なり。故に諸という。心識名異にして義通ざり。故に天親等は三界唯心をもつて唯識の義を成立す。自余は上の説に同じ。

また『大日經』にいわく、「我れすなわち心位に同なり。一切處に自在にして、普ねく種々の有情および非情に遍

ぜり。ア乾阿字は第一命なり、バ叉嚩字を名づけて水となし、ラ差囉字を名づけて火となしウン轄畔字を名づけて風となす、キャ微佉字は虚空に同じ」と。

この經文の初の句は我れすなわち心位に同なりとは、いわゆる心はすなわち識智なり。後の五句はすなわちこれ五大なり。中の三句は六大の自在の用、無礙の徳を表す。『般若經』および『瓔珞經』等にもまた六大の義を説けり。

かくのごとくの六大能く一切の仏および一切衆生器界等の四種法身と三種世間とを造す。故に大日尊如来發生の偈を説いていわく、

「能く随類形の諸法と法相と諸仏と声聞と救世の因縁覺と勤勇の菩薩衆とを生ず および 人尊もまた然り 衆生・器世界次第にして成立す 生住等の諸法常恒にかくのごとく生ず」と。

この偈は何の義をか顯現する。

いわく六大能く四種法身と曼荼羅とおよび三種世間とを生ずることを表す。

いわく諸法とは心法なり、法相とは色法なり。

またつぎに諸法というのは通名を挙げ、法相とは差別を顯わす。

故に下の句に諸仏・声聞・縁覺・菩薩・衆生・器世間次第にして成立すという。

またつぎに諸法とは法曼荼羅なり、法相とは三昧耶身なり。諸仏乃至衆生とは大曼荼羅身なり。器世界とは所依の土を表す。この器界とは三昧耶曼荼羅の總名なり。

またつぎに仏・菩薩・二乗とは智正覺世間を表す。衆生とは衆生世間なり。器世界とはすなわちこれ器世間なり。

またつぎに能生とは六大なり。随類形とは所生の法なり。すなわち四種法身・三種世間これなり。



故につきにまたいわく、「秘密主、曼荼羅の聖尊の分位と種子と標幟とを造することあり。汝まさに諦に聴け、われ今演説すべし。すなわち偈を説いてのたまわく、

真言者円壇を、まず自体に置き、足より腔<sup>ほぞ</sup>に至るまで、大金剛輪を成し、これより心<sup>むね</sup>に至るまで、まさに水輪を思惟すべし、水輪の上に火輪あり、火輪の上に風輪あり」と。

いわく、金剛輪とは阿字なり。阿字はすなわち地なり。水火風は文のごとく知んぬべし。円壇とは空なり。真言者とは心大なり。長行の中にいうところの聖尊とは大身なり。種子とは法身なり。標幟とは三昧耶身なり。羯磨<sup>かつま</sup>身とは三身に各各にこれを具す。つぶさに説くことは経文に広くこれを説けり。文に臨んで知んぬべし。

またいわく、大日尊ののたまわく、「金剛手、諸の如来の意より生じて業<sup>ごう</sup>

戲<sup>け</sup>の行舞をなすことあり、広く品類を演べたり。四界を撰持して心王を安住し、虚空に等同なり。広大の見非見の果を成就し、一切の声聞・辟支仏諸菩薩の位を出生す」と。

この文は何の義をか顕現するや。

いわく六大能く<sup>よ</sup>一切を生ずることを表す。

何をもつて知ることをうるや。

いわく、心王とは識大なり。四界を撰持すとは四大なり。虚空に等しとは空大なり。この六大は能生なり。見・非見とは欲色界無色界なり。下<sup>しも</sup>は文のごとし。すなわちこれ所生の法なり。

かくのごとくの経文はみな六大をもつて能生となし、四法身・三世間をもつて所生となす。この所生の法は上<sup>かみ</sup>、法身に達し、下<sup>しも</sup>、六道におよぶまで、<sup>そ</sup>籠<sup>へだて</sup>細隔あり、大小差ありといえども、しかれどもなお六大を出でず、故に仏、

六大を説いて法界体性となしたもう。

もろもろの顕教の中には四大等をもつて非情となし、密教にはすなわちこれを説いて如来の三摩耶身となす。四大等心大を離れず、心色異なりといえども、その性すなわち同なり。色すなわち心、心すなわち色、無障無礙なり。智すなわち境、境すなわち智、智すなわち理、理すなわち智、無礙自在なり。能所の二生ありといえども、すべて能所を絶せり。法爾の道理に何の造作かあらん。能所等の名はみなこれ密号なり。常途浅略の義を執して種種<sup>けろん</sup>の戲論をなすべからず。

かくのごとくの六大法界体性所成の身は、無障無礙にして互相に涉入相應し、常住不変にして同じく實際に住せり。故に頌に「六大無礙にして常に瑜伽なり」という。無礙とは涉入自在の義なり。

常とは不動、不壞等の義なり。瑜伽と

は翻じて相応という。相応渉入はすなわちこれ即の義なり。

(四) 四種曼荼各不離

四種曼荼各々離れずとは、『大日經』に説かく、「一切如來に秘密身あり。いわく字・印・形像なり」と。字とは法曼荼羅なり。印とはいわく種々の標幟<sup>ひょうし</sup>すなわち三昧耶曼荼羅なり。形とは相好具足の身すなわち大曼荼羅なり。この三種の身に各々威儀事業<sup>いぎじぎう</sup>を具す、これを羯磨曼荼羅と名づく。これ四種曼荼羅なり。

もし『金剛頂經』の説によらば、四種曼荼羅とは、一には大曼荼羅、いわく一一の仏菩薩の相好の身なり。またその形像を縦画するを大曼荼羅と名づく。また五相をもつて本尊の瑜伽を成ずるなり、また大智印と名づく。二には三昧耶曼荼羅、すなわち所持の標幟、刀劍、輪寶、金剛、蓮華等の類これなり。もしその像を画するまたこれなり。

また二手をもつて和合し、金剛縛<sup>こんごうばく</sup>より発生して印を成ずるこれなり、また三昧耶智印と名づく。三には法曼荼羅、本尊の種子真言なり。もしその種子の字を各々の本位に書く、これなり。また法身の三摩地および一切の契經の文義等みなこれなり。また法智印と名づく。四には羯磨曼荼羅、すなわち諸仏菩薩等の種々の威儀事業、もしは鑄、もしは捏<sup>ねつ</sup>等またこれなり。また羯磨智印と名づく。

かくのごときの四種曼荼羅、四種智印その数無量なり。一一の量虚空に同じ。かれはこれを離れず、これはかれを離れず。なおし空・光の無礙にして逆えざるがごとし。故に「四種曼荼各々離れず」という。離れずとはすなわちこれ即<sup>そく</sup>の義なり

(五) 三密加持速疾顯

「三密加持すれば速疾に顯わる」とは、いわく、三密とは一には身密、二には

語密、三には心密なり。法仏の三密は甚深微細にして等覺十地も見聞するのと能わず、故に密という。一一の尊等しく利塵の三密を具して互相に加入し、彼此撰持せり。衆生の三密もまたまたかくのごとし。故に三密加持と名づく。もし真言行人あつてこの義を觀察して、手に印契<sup>いんげい</sup>を作し、口に真言を誦じ、心三摩地に住すれば、三密相応して加持するが故に、早く大悉地を得。

故に『經』にいわく、「この盧遮那仏の三字の密言共に一字にして無量なり。まさに印・密言をもつて心を印すれば、鏡智を成じて速に菩提心金剛堅固の体をう。額を印すればまさに知るべし、平等性智を成じて速に灌頂地の福聚莊嚴の身をう。密語をもて口を印するとき、妙觀察智を成じてすなわちよく法輪を転じて仏の智慧身を得。密言を通じて頂を印すれば、成所作智を成じて仏の變化身を証し、よく難調の者を伏

す。この印密言によつて自身を加持すれば、法界体性智毗盧遮那仏の虚空法界の身を成ず」と。

またいわく、「法身真如觀に入つて一縁一相平等なることなoshi虚空のごとし。もしよく專注して無間に修習すれば、現生にすなわち初地に入り、頓に一大阿僧祇劫あそぎこうの福智の資糧を集む。衆多の如来に加持せらるるによるが故に、いまし十地・等覺・妙覺に至つて薩般さはんにや若を具し、自他平等にして一切如来の法身と共に同じく、常に無縁の大悲をもつて無辺の有情を利樂し大仏事を作す」と。

またいわく、「もし毗盧遮那仏自受用身所説の内證自覺証智の法、および大普賢金剛薩埵他受用身の智によらば、現生において曼荼羅阿闍梨あじやりに遇あひ逢い、曼荼羅に入ることを得。いわく、羯磨こんまを具足し、普賢三摩地をもつて金剛薩埵を導入してその身中に入る。加持の

威徳力によるが故に、須臾しゅゆの頃あひだにおいてまさに無量の三昧耶、無量の陀羅尼門を証すべし。不思議の法をもつてよく弟子の俱生の我執の種子を變易へんにやくす。時に応じて身中に一大阿僧祇劫の所集の福德智慧を集得す。すなわち仏家に生在すとなす。その人一切如来の心より生じ、仏口より生じ、仏法より生じ、法化より生じて仏の法財を得。法財とはいわく、三密の菩提心の教法なり」と。（此れは初めて菩提心戒を授かる時、阿闍梨の加持方便によつて得る所の益やくを明す）「わづかに曼荼羅を見ればよく須臾しゅゆの頃あひだに淨信す。歡喜の心を以て瞻都せんとするが故に。すなわち阿頼耶識あらやしきの中において金剛界の種子しゅじを種う」と。（この文は初め曼荼羅海会の諸尊を見て得る所の益を明す）「つぶさに灌頂受職の金剛名号を受く。これより已後広大甚深不思議の法を受得して、二乗十地を超越す。この大金剛薩埵五

密瑜伽の法門を四時において行住坐臥の四威儀の中に無間に作意し修習すれば、見聞覺智の境界において、人法二空の執ことごとくみな平等にして、現生に初地を証得し、漸次に昇進す。五密を修するによつて涅槃生死において染せず著せず。無辺の。五趣生死において広く利樂をなし、身を百億に分ち、諸趣の中に遊んで有情を成就して金剛薩埵の位を証せしむ」と。（これは儀軌法則によつて修行する時の不思議の法益を明す）

またいわく、「三密の金剛を以て増上縁となしてよく毗盧遮那三身の果位を証す」と。

かくのごときの経等はみなこの速疾力不思議神通の三摩地の法を説く。もし人ありて法則を闕かかずして昼夜に精進すれば、現身に五神通を獲得す。漸次に修練すればこの身を捨てずして進んで仏位に入る。つぶさには経に説く



がごとし。

この義によるが故に「三密加持すれば速疾に顕わる」という。加持とは、如来の大悲と衆生の信心とを表す。仏日の影衆生の心水に現ずるを加といい、行者の心水よく仏日を感じずるを持と名づく。行者もしよくこの理趣を観念すれば、三密相応するが故に、現身に速疾に本有の三身を顕現し証得す。

故に「速疾に顕わる」と名づく。常の即時即日のごとく、即身の義もまたかくのごとし。

## 六 重重帝網名即身

「重重帝網なるを即身と名づく」とは、これすなわち譬喩を挙げてもつて諸尊の利塵の三密、円融無礙なることを明す。帝網とは因陀羅珠網いんだらしゅもうなり。いわく身とは我身・仏身・衆生身これを身と名づく。また四種の身あり、いわく、自性・受用・変化・等流これを名づけて身という。また三種あり、字・印・

形これなり。かくのごとく等の身は縦横重重にして鏡中の影像と燈光との渉入するがごとし。かの身すなわちこれこの身、この身すなわちこれかの身、仏身すなわちこれ衆生身、衆生身すなわちこれ仏身なり。不同にして同なり。不異にして異なり。

故に。三等無礙の真言にいわく、「アサンメイチリサンメイサンマエイソワカ乾似蚕簸似蚕似嵯讚泗爾」

初の句義をば無等といい、次をば三等といい、後の句をば三平等という。仏法僧これ三なり。身語意また三なり。心仏および衆生三なり。かくのごとくの三法は平等平等にして一なり。一にして無量なり。無量にして一なり。しかもついに雑乱せず。故に「重々帝網なるを即身と名づく」という。

## 七 法然具足薩般若——円鏡力故実・智

「法然に薩般若を具足して」とは、『大

日経』にいわく、「我れは一切の本初なり。号して世所依と名づく。説法等比なく、本寂にして上あることなし」と。

いわく、我れとは大日尊の自称なり。一切とは無数を挙ぐ。本初とは本来法然にかくのごとくの大自在の一切法を証得するの本祖なり。如来の法身と衆生の法性とは同じくこの本来寂靜の理を得たり。しかれども衆生は覺せず知せず。故に仏、この理趣を説いて衆生を覺悟せしめたもう。

またいわく、「もろもろの因果を樂欲するもの、かの愚夫のよく真言と真言の相とを知るにあらず。何をもつての故に。因は作者にあらずと説けば、かの果もすなわち不生なり。この因因すらなお空なり。云何いかんが果あらんや。まさに知るべし、真言の果は悉く因果を離れた」と。

上の文に引く所の「我れ本不生を覺り、乃至因縁を遠離せり」の偈、およ

び「諸法本より不生なり、乃至因業なり、虚空に等し」。かくのごとく等の偈はみな法然に具足するの義を明す。

また『金剛頂』にいわく、「自性所成の眷属、金剛手等の十六大菩薩、乃至各各に五億俱抵の微細法身の金剛を流出す」と。

かくのごとき等の文もまたこれこの義なり。

法然というは諸法自然にかくのごとくなるを顕わす。具足とは成就の義、闕少なきの義なり。薩般若とは梵語なり。古に薩云というは訛略なり。つぶさには薩羅婆枳嬢囊さらばぎじやのうといい、翻ばんじて一切智智という。一切智智とは、智とは決断簡択の義なり、一切の仏かくかく々々五智、三十七智乃至、刹塵せつじんの智を具せり。

次の両句はすなわちこの義を表す。もし決断の徳を明すにはすなわち智をもつて名を得。集起を顕わすにはすな

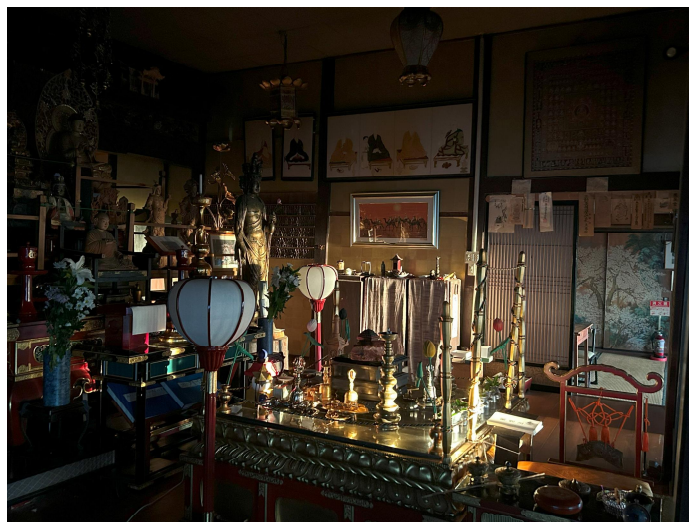
わち心をもつて称となす。軌持を顕わすにはすなわち法門に称を得。一一の名号みな人を離れず。かくのごとくの人、数刹塵せつじんに過ぎたり。故に一切智智と名づく。顕家の一智をもつて一切に對してこの号を得るには同じからず。心王とは法界体性智等なり。心数とは多一識なり。

「各々五智を具す」とは一一の心王心数に各名にこれあることを明す。實際智とは高広無數の義なり。

「円鏡力の故に実覺智なり」とは、これすなわち所由を出す。一切の諸仏何によつてか覺智の名を得たもう。

いわく、一切の色像のごとく高台の明鏡の中に現ずるがごとく、如来の心鏡もまたまたかくのごとし。円明の心鏡高く法界の頂に懸つて寂にして一切を照して不倒不認なり。かくのごとくの円鏡いずれの仏にかあらざらん。故に「円鏡力の故に実覺智なり」とい

う。



弘法大師空海の『真言密教』

弘法大師空海の密教（真言密教）は、三部書といわれる『即身成仏義』『声字実相義』『吽字義』の著作に示されている。

また、真言密教は、弘法大師空海の探求によって構築された世界に希に見る革新的日本密教である。

真言密教の特質は、①大日如来、②法身説法、③菩提心・三昧耶、④三密瑜伽、⑤利益にある。

「菩提心」と「三昧耶」そして「三密瑜伽」は真言密教の根本になる。

菩提心は梵字の bodhi-citta の音写で「阿耨多羅三藐三菩提」という最上の仏の悟りを求める心をいう。

三昧耶は梵字の samaya の音写で仏と衆生が本来的に平等であること、即ち、本質的に一体であるこ

と。また、一切衆生を救い尽くす仏の本誓を意味する。これは普遍である仏が、個々のわれわれといつも一心同体で一緒であり、同苦同悲であるということ。

三密瑜伽については下記にて明らかにする。

これらは総じて、真言密教の万象の統合の原理（金剛界）と大慈大悲（胎藏界）に集約される。

弘法大師空海の真言密教の教理の中心核は「六大・四曼・三密」にある。

弘法大師空海は即身成仏について『即身成仏義』と二経一論八個の証文（『金剛頂経』四文、『大日経』二文、『菩提心論』二文）を引用して示す。

ついで、次の「二頌八句の偈」によってその即身成仏のプロセスを示す。

「六大無碍にして常に瑜伽なり、四種曼荼各々離れず、

三密加持して速疾に顕る、重重帝網な

るを即身と名づく。

法然に薩般若を具足して、心数心王刹塵に過ぎたり、

各々五智無際智を具す、円鏡力の故に実覚智なり。」

この短い二頌八句の偈頌は「即身成仏」の内容を語るもの。

「六大無碍」（体）、「四曼荼羅」（相）、「三密加持」（用）は真言密教の教理の真髓を語るものである。

これを意識すれば、次のようになる。

「六大無碍にして常に瑜伽なり」は、即身の本源（体性、存在性）を示し、

「四種曼荼各々離れず」は、即身の実相を表す。

「三密加持して速疾に顕る」は、即身の互換重合するはたらき・用を示し、

「重重帝網なるを即身と名づく」は、即身の本源における同一性を示す。

「法然に薩般若を具足して」は、一切



衆生は不生の仏心（仏としての本質を）を具えていること。

「心数心王刹塵に過ぎたり」は、心数は無辺なる万生万物の個々の仏心の智を表す。心王はいかなるものも個々の生命体として全的に統合されたものとしての役割と使命を帯びていること。心王は個々の全体性。心数はその全体と個が互換重合して更なる上位の全体と個に統合されること。

真言密教では心王は諸尊の中核に「大日如来」を本源とした、諸仏、諸菩薩、明王等の諸尊は大日如来の心数として見えざる世界を顕現し、更にこの見えざる世界と現象世界とが互換重合渉入するプロセスを経てしながら万生万物が顕現するという仏身の統一観を示す。留意せねばならないことは曼荼羅界も現象界も顕現するが実体ではないということ。実体ではないから仮想ではないと断見できないこと。

では何かというと、本不生である本源は常に先験であり、経験など五蘊やあらゆる次元の意識に記憶された概念であるが、それが、形のないものから形あるものへ顕現する型枠、あるいは、映し出すスクリーンであり、この物質化へのプロセス上絶えずフィードバックされながら進化していく構造にある。ものとしての実体はないこと。

顕現は先験より今に経過し消失するものであるがゆえであること。実体とみることの誤りは、意識のスクリーンに映し出された虚像を見て、それが実在する実体であると見誤るようなもので、それが虚妄に陥ることだとブッダは厳しくいさめられた。

弘法大師空海は密教が従来からの仏教を超越する真言密教を展開したが、ブッダの覚りから逸脱することは無かった。唯識を遙かに超えていたが、それよりもなおさずブッダの覚りを展開した

ものであろう。われわれ凡愚はブッダの覚りの内容をうかがい知れないが、ブッダ親説を串にして、弘法大師空海の真言密教とはなんぞやと問えば、それはブッダ親説の阿字本不生に尽きるといえる。

これを、わかりやすくとえれば、ネオンサイン電光掲示板やディスプレイに映し出されたものを、誰も実体だとは思わない。それを映し出している創造世界と光りの本源があることは承知している。しかしまた、ここで、更に、注意を要することは、それでは、創造世界と光りの本源を、どこか見えざるところに実在界があつて、そこから投影されているということも、虚妄に陥っている弘法大師空海は指摘する。では先験なる本不生、すなわち本源なる大日如来とは一体何であるのか。

理解しがたいかもしれないが先験なる本不生が現象界に顕現しているのは、

本不生を本源とする見えざる世界と現象界が絶えず互換重合渉入する刻々の新生創発現象ととらえることが真言密教である。

「各々五智無際智を具す」は、すべての仏が完全なる知恵をすべて具えていることを表す。また、「円鏡力の故に実覚智なり」は、全と個の統合なる成仏を示す。

インドに発生した仏教は、宇宙の本体は宇宙を構成する六つの要素であると考えていた。これは、宇宙は色（地・水・火・風・空Ⅱ物質）と心（識Ⅱ精神）が渾然一体となった実相（瑜伽）である。

この六つの構成要素（六大）は互換重合無碍渉入し、さえぎるものがなく（無碍）、永遠（時空を超えて）に融合して結びつき、万物を構成する本質的な要素になる。

宇宙も大日如来も私たち人間もこの

六大が深く密接に結びついたもの（瑜伽）であり、瑜伽の中であらゆる生命体が生かされ、それが集まって世界が構成されている。全体と個の統合（曼荼羅）である。さらに、大日如来の慈悲と智慧がこの世界を新生創造し続ける源であることを弘法大師空海は示している。

このような六大の加持感応道交（互換重合渉入）する活動的な事実を持って、先験なる阿字本不生から刻々と今に経過し消失し、宇宙や、万物が新生創造され進化している実相ととらえる。

大日如来は宇宙の根源仏として、すべての如来、すべての菩薩を統合するものである。大日如来は本不生であるので原理そのものであり、本来的にはあらゆる識をもつてしてもとらえることのできないものだ。しかし、その本源からあふれ出す力が、この互換重合渉入によって、無辺際の大宇宙を創発

し、大自然界の鉱物や草木や動物、人間など森羅万象の中に生命を宿し、現象化しているのである。

また、あらゆる現象や真理を認識する智慧は大日如来から生まれ、仏心を宿す万生万物がこれによってこの智慧の働き手として生きる大日如来のいのちの顕現となっていると弘法大師空海は示す。

宇宙を構成する六大は可視化できないダークエネルギー（神聖幾何学）。四種の曼荼羅は宇宙の相をその働きによって可視化する原理として神聖幾何学である型を通して六大をダークマターとして捉える。

#### 四種曼荼羅

①「大曼荼羅（実相）」とは、宇宙が大日如来の形となって現われる全体を表すもので、一つ一つの仏菩薩の姿・形を具えた身体をいう。

②「三昧耶曼荼羅（姿・形の奥にある

意味や働きの相」とは、さまざまな諸尊が所持している法具（刀剣・輪宝・金剛杵・蓮華など）を目印とするもので、仏の持ち物によって仏の本誓を象徴的に表わしたものの。宇宙的には神聖幾何学上で作動している。

③「法曼荼羅（音声の相）」とは、仏菩薩など智慧を秘密のことばである真言で象徴し、梵字（これを「種字」といい「種字曼荼羅」とも云う）で表わしたものの。仏の智慧の印（しるし）。無限の波動から局所の波動まで響応する「対話の原理」をしめす。

④「羯磨曼荼羅（宇宙の活動の相）」とは、さまざまな仏の活動を立体的に表現するものです。供養や威儀として表すもので「立体マンダラ」ともいう。立体マンダラには、瞑想で虚空に観想したもの（自性マンダラ）や実際に人の目に見えるように木・粘土・金属で表現したもの（羯磨マンダラ）がある。

これは現象とそれを生出せしめる大悲胎藏ダークマターの世界である。

宇宙は絶え間なく変化する実相にある。人はこの大日如來の四曼を通じて仏心に宇宙を観想し捉える。

弘法大師空海は先験より今に消失する実相を捉える手段として「三密」を示した。

三密とは、①「身密」（印を結ぶこと）  
②「口密」（真言を唱えること）  
③「意密」（瞑想すること）  
④「言葉の持つ力を表すことだが、われわれが大日如來共鳴する響き、こちらの対話である）、⑤「意密（瞑想すること）  
⑥「宇宙の調和と秩序を図る為の働き）」をいい、宇宙の絶え間なく変化する働きや現象を三密という行為によって把握するためのものであるが、自己凝視である。大日如來とわれわれが

加持感応同交することを示す。

仏と私たちの身体、言葉、心の働きが不思議な働き（互換重合渉入）によって加持感応するとき、速やかに悟りの世界凡常不二という質的大転換が起こる。その力の原点は、あたかも帝釈天が持つ天網のように幾重にも重なり合いながら、映じ合うことを名づけて即身というのであるが、即身とは互換重合渉入する大宇宙といえる。

あらゆるものは、あるがままに、計り知れない多くの仏の姿をしている。これは、アラユモノのあるがままは不生の仏心であるということ。それゆえ、一切の智慧を備えている。すべての人々には各々に「心の作用」や「心の主体」が備わって数限りなく存在しているということである。

それは、また、心の作用、心の主体のそれぞれに五智如來（金剛界の五仏）  
①大日如來・②阿閼如來・③宝生如



来・④阿弥陀如来・⑤不空成就（釈迦如来）の智慧と際限のない智慧（五智＝無際智＝大日如来の智）が備わり何一つ欠けるものは無い。

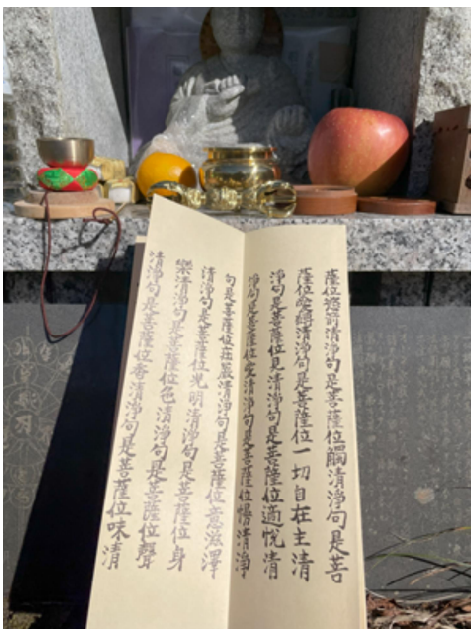
これらの智慧を持って、すべてを映し出す鏡のように照らし、真理に目覚めた智者即ち光り輝くものとなる。

その核心は三密加持（三密瑜伽）にあることを弘法大師空海は示す。

この両経は真言密教で「両部の大経」とされる根本教典である。これらにより「即身成仏」が証明されたのであるが、両教は別々の密教の流れの中でそれぞれが継承されたが、この両教の正式な継承者である中国・青龍寺の恵果阿闍梨から弘法大師空海が伝法の灌頂を受け、ブツダ親説阿字本不生にまで高められたのである。

七一六年、中インドから入唐した「善無為」が、法華経を凌ぐ教え『大日経』（正式名称は『大毘盧遮那成佛神変加持経』という）の解釈書（論）を洛陽に於いて著した。

また、七二〇年には、インドから渡来した「金剛智」により『大日経』を凌ぐ最高教典『金剛頂経』が長安にもたらされた。





東寺 立体曼荼羅

## 参考文献

●ポロブドゥールと『初会金剛頂経』

石井和子 (東京外国語大学)

●『評説 インド仏教哲学史』

山口瑞鳳 岩波書店

●『理趣経の研究』  
りしゅきよう

梅尾祥雲全集V 密教文化研究所

●『弘法大師著作全集』  
ほう

勝又俊教 山喜房佛書林

●『和文經典 般若理趣経』  
はんによりしゅきよう

梅尾祥雲 密教文化研究所

●『サンスクリット文和訳 金剛頂経』津田真一 (春秋社)

●真言宗教相全書五『金剛頂経』

監修宮坂宥勝 (四季社)

●『神道祭祀の発展と神祇信仰の多様化』「上方震下り 瓢箪鯰の化物 一名

難獣といふ 安政二乙卯十月二日夜興行」

●『神道祭祀の発展と神祇信仰の多様化』「上方震下り 瓢箪鯰の化物 一名

難獣といふ 安政二乙卯十月二日夜興行」

行」

●國學院大學伝統文化リサーチセンター

●『先代旧事本紀』

安本美典監修志村裕子訳 批評社

●『慈雲尊者神道著作全集』八幡書店

●『エノクの鍵』

j.jハータック

ナチュラルスピリット

●『イザヤ書I』

ヘブライ語聖書対訳シリーズ

ミルトスヘブライ文化研究所

●『日本の上古代文化』

アシヤ文化研究会編

正しい教育を守る会 発行

●『相似象』相似象学会誌

1号から15号 編集者宇野多美恵

●『カタカムナへの道・潜象物理入門』 関川二郎著・稲田芳弘編

●『完訳カタカムナ』保江邦夫監修・

天野成美著 明窓出版

●総本山長谷寺 資料

●『東寺立体曼荼羅』絵はがき

●『ホロフラクトグラフィック宇宙論』ナシーム・ハラメイン

●NHKニュース記事

●『ホロフラクトグラフィック宇宙論』ナシーム・ハラメイン

●NHKニュース記事

他

令和五年十一月吉日



朝日山萬歳楽院法圓寺  
補陀洛山善明院歡喜寺

〒969-1601

福島県伊達郡桑折町北町字北町十七  
番地

TEL 024-582-2959 番

編集発行住職佐藤好久



